

---

# ゼロの使い魔～建国物語～

黒騎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ゼロの使い魔〜建国物語〜

### 【Nコード】

N6882W

### 【作者名】

黒騎

### 【あらすじ】

（旧タイトル『ゼロの使い魔〜純白の姫騎士〜』）  
死んで神からチート過ぎる能力を貰った主人公がハルケギニアに旅立ち、チートな国と軍を作る物語

## 第一話 プロローグ(前書き)

この作品が初執筆初投稿になります。間違い等が有るかもしれませんがどうかよろしくお願いいたします。

## 第一話 プロローグ

「・・・何だ、此処は」

気が付いたら私は何処までも白い空間に居た。だが、そこで突然誰かの声が聞こえた。

（おや、もう気が付いたのかい？）

「誰だ？何処に居る？」

私は周りを見るが誰も居なかった。

（私はそこには居ないよ。君の頭に直接語りかけているんだよ。）  
頭に直接か、もしかしてこの方は神様みたいな存在かな？

（うん、神様で合ってるよ。良く分かったね）

「勝手に心を読まないで下さい。で、此処は何処で、何故私はこの様な所に居るのですか？」

（此処は天国と地獄の狭間で、君が此処に居るのは此方のミスで君が死んでしまったので私が君を此処に転送したんだ。）

私はその言葉を聞いて殺気を込めて呟いた。

「・・・ほお、ミスのせいで死んだしまったと？」

（私がやった訳では無い、だから頼む、その凄まじい殺気を抑えてくれ。）

「ミスった者を出してくれませんか？」

（今は無理だ。理由は地獄に居る閻魔大王の元で1000年間、教育指導する事になって今は地獄に居るからね）

なるほど、十分に罰は受けているという事か。なら良いだろう。

「それで？私はこれからどうなるんですか？」

（君には転生するか、このまま天国に行くかのどちらかを選んでもらう。）

「もちろん転生を選ばせて頂きます。で、何処に転生させてもらえるんですか？」

（ゼロの使い魔の世界だ。ちなみに原作破壊はしても大丈夫だ。）

神様がそう言うと、目の前に赤色の箱が突然出てきた。

「これは・・・何の箱ですか？」

（これは能力を決めるために用意した物で能力を決める物だ。ちなみに能力は三つまでだ。あの世界は力が無いと腐った貴族に殺されるかもしれないからな。忘れていたが容姿はランダムで決まるから文句を言わないでくれよ。）

私は話を聞いた後、箱から三枚のカード引くと、そのカードが手元から消えた。

（それじゃ〜今引いたカードの発表だ。能力は『全知全能』『不老不死』『女神の祝福』この三つだ。これ、チート過ぎね？）

「確かにチート過ぎますが、それは私の運が良かったからです。で？『女神の祝福』とは、どんな力なんですか？」

（簡単に言えば、手で触れるだけでどんな病気や怪我、そして呪いを治したりする力で、この力を使いながら歌うと広範囲で同じ様に治ったりする便利な力だ）

「能力については大体把握しました。で？私はゼロの使い魔の何処に送られるのですか？」

( トリステイン北西部の沖合にある三つの島からなるトリステイン王国領オーシア諸島を治めている貴族の子供として転生してもらう )

「オーシア諸島？ある程度原作を読んだ事はありますが、そんな島は無かったと思いますか？」

( 私が作った島だ。そこを拠点に平民のための国を作ってもいいぞ。ちなみに資源は豊富だぞ。 )

確かにハルケギニアの平民の扱いは酷いからな、第一目標は軍を作り、第二に国家を作る事に決定だな。

( 納得したみたいだから今から送るぞ。 )

「ああ、もう一つ聞きたい事が有る」

( なんじゃ？ )

「『不老不死』についてなんですが、これでは赤ん坊から成長出来ないと思つんですが？」

( それについては心配は不要だ。一応二十歳ほどまで成長出来る様にしておく )

「ありがとうございます」

( では、送るぞ )

私はその言葉を聞いて一步横にずれると、さっきまで立っていた場所に大きな穴が開いた。

「・・・ほう、死にたい様だな。」

私もありったけの殺気を込めて言い放った。

（申し訳ございませんでした。目の前にゼロ魔の世界に行くための扉を用意しました。・・・だから・・・その・・・とにかくゴメンナサイ！！）

私はその謝罪を無視して扉を開けこの空間から消えた。

（お願いだから何か言っ~~~~~！！）

## 第二話 家族

「ばあぶ？（ここは？）」

目が覚めると私は見慣れぬ部屋に置いてあるベビーベッドに寝かされていた。

「だ、だあぶ、ぶあ？（体が思うように動かん）」

私がなんとか体を動かそうとしていると、ベッドの傍に女性が現れ私を抱き上げた。

「あなた見て起きたわ。ふふ、何度見てもかわいいわ」

「当たり前だ、私達二人の子供なんだから」

どうやらこの二人が私の新しい両親の様だ。父の容姿は簡単に言えば金髪碧眼の凛々しい方で、母の容姿は髪が銀色だがFateのセイバーによく似ている。

「あなた？この子に付ける名前は決まったのですか？」

「我がオーシア家の嫡男だ、当然名前ならもう決まっている。この子の名前はレイ・レナード・ド・オーシアだ」

「レイ・レナード・ド・オーシア、良い名前ね。レイ、生まれて来てくれてありがとう」

こちらこそ良い名前を付けて頂きありがとうございます。と、心の中で感謝していると、強烈な眠気に襲われそれに逆らう事が出来ずに寝てしまった。

私が転生してから三年が経ち順調に育っている。ある事を除いて。ある事、それは父と母の血を綺麗に半分ずつ引き継いだせいか見事に容姿がFateのセイバーになってしまった事だが諦めるとしよう。

私はあまりすることが無いのでこの三年間で出来る限りの情報を集めた結果、ド・オーシア家の事がある程度を知ることが出来た。

まずド・オーシア家の階級は伯爵で、領地はトリスティン北西部に有りオーシア諸島の他にも最近、大きな島を領地として貰ったらしいがオーク鬼等の危険な亜人や幻獣が住み着いているため、宮廷貴族の嫌がらせだ、と言われています。さらに、トリスティンとゲルマニアの国境沿いにあるため領軍にもお金を掛けないといけないが、ド・オーシア領が農業を中心にある程度発展しているおかげで、ド・オーシア伯爵家は他の貴族の様に借金をせずに済んでいるそうです。

次に家族の紹介をさせていただきます

父の名前はイオビス・ザーランド・ド・オーシアで伯爵家の現当主魔法のクラスは土のスクエアで、父はクリエイト・ゴーレムが特に優れているらしく二つ名は『一人軍隊』

母の名前はカナリア・ベルティーン・ド・オーシア

魔法のクラスは水のトライアングルで、治療魔法のヒーリングや秘薬の製作が得意で二つ名は『睡蓮』で父が付けたらしい。

ちなみに父との出会いは魔法学院で母を見た父が一目惚れしその場でプロポーズされた時らしく、その時は驚きのあまり了承してしまっただけだが、今では父にベタ惚れだ。

何故断言できるかって？今現在、テーブルを舞台に、私の目の前でピンク色の空間をこれでもかと展開しているからだ。だが、これ以

上この空間が続くと朝食が甘くなってしまつのでここはバツサリと断つ事にした。

「父上、母上、これ以上この空間が続きますと口から砂糖を吐いてしまいますのでやめて下さい。イチヤイチャするのは後で二人だけの時に出来るでしょっ?」

「「ちっ!」「」

舌打ちされた!?

### 第三話 バグキャラ？

「あゝ暇だ」

私はそう言いながら今まで読んでいた絵本をテーブルの上に置いた。転生してから三年で私は既に普通に喋ったり、字を読んだり書いたり出来る様になったので、私の両親は「この子は天才だ！？」と、その都度自分の事の様に喜んでくれた。

話を戻そう。

この世界の字は『全知全能』を使うと簡単に知る事が出来きたが、貰った力に頼り過ぎ、自惚れてしまう事を怖れた私が、自分の力で学び考える事が出来る様に必要な時以外能力をOFFにする事にし

ただ。絵本は読む事はその一環で父や母に買って貰い読んでいたが、字を覚えた今では家に有る絵本を読み尽くしたため、かなり暇だ。……よし、執務室に行こう。

----- 執務室 -----

コンコン

「誰だ？」

「父上、レイです」

「おお、レイか。入りなさい」

「はい、失礼します」

「レイがここに来たのは初めてだな」

「はい、初めてです。こちらに来たのは、父上に頼みたい事が有るからです」

「レイの頼みたい事とは何だ？」

「絵本は全て読んでしまったので、書庫の本を読ませて頂きたいのです」

「そうか、三歳の子供では普通は無理だが、レイだから大丈夫だよ。よし、書庫の利用を許可する。あ、それとお前には四歳になったら魔法を学んでもらう。」

へっ！？普通は五歳から六歳からじゃないの？

「四歳からでは早すぎませんか？」

「お前の成長を見て、私とカナリアが四歳から、と決めたんだけ。それにレイだからな」

「はあ、分かりました。では、失礼しました。」

あれ？俺ってまだ能力を使って無いのにバグキャラ扱いされてる？

## 第四話 プラン

あれから一年が経った。

この一年、私は書庫で魔法書以外に農業や経済等に関する本を読んだのだが、やはり技術レベルは地球で言う中世ヨーロッパぐらいしかない。6,000年以上もこの状態が続いているのは余りにも異常だ。

「……魔法絶対主義とブリミル教の影響か」

さらに最悪なのはブリミル教の異端審問と聖戦だ。ブリミル教の異端審問は魔法絶対主義やブリミル教を脅かす者を処刑するためだ。恐らく私がメイジを簡単に殺せる武器や兵器を作り出すと間違いない異端認定されるだろう。この事から今の武器を少し改良した物は使う事が出来るだろうが、新兵器等は？時？が来るまで使う事はあまり出来ない。使うとしても、見つからない様にしなければならず、新兵器を領軍に配備するのは現実的に不可能だ。

そして、私が最も嫌悪する聖戦だ。

これは私の推測だが、ブリミル教の目的はサハラにある聖地の奪還だが、その裏にはブリミル教とロマリア連合皇国の思惑が見て取れる。ブリミル教とロマリア連合皇国は、人間の魔法ではエルフの精霊魔法に勝てない事を知りながら聖戦を発動し各国の国力消耗を狙ったのだらう。その証拠に歴史書には聖戦後、徴兵した多くの平民を失い、また多くの国庫を使った各国は国力が低下したと書かれている。

考えただけでも腹が立つ。．．．．．やはり必要か。

「民間軍事会社『国境なき軍隊（MSF）』」

『国境なき軍隊』は、主に商隊や商船の護衛、オーク等亜人や幻獣の討伐、国境線の警備を中心に依頼を請け負う予定で、拠点は離島と言う事も有り、人がほとんど住んでいないオーシア諸島に事に決まっており、神様が言っていたオーシア諸島の資源は戦力拡大に利用するつもりだ。余り信用は出来ないが。

そして、『国境なき軍隊』の主な部隊は二つで陸上部隊と航空部隊に分ける事になっている。

陸上部隊の主な戦力は二つ。

一つ目は攻撃力と防御力に特化したガーゴイルだが、術式を構築し、またその術式にもっとも最適な形状した防具を採用し設計したためか、外見は『ネギま』のMM重装魔導装甲兵に酷似している。ガーゴイル名は『ソリドス』<sup>メカロメセンブリア</sup>

二つ目は機動力と攻撃精度に特化したガーゴイルで、こちらも同じように術式を構築、それに最適な防具を採用し設計。こちらの外見は『ソリドス』とは違うものの、『ネギま』の戦乙女騎士団の騎士団正装に酷似している。ガーゴイル名は『レイテル』

これらのガーゴイルの動力には魔石を利用した魔導エンジンを搭載予定で、既に術式の構築と設計は済んでいる。

魔導エンジンに利用する魔石とは、風石や火石等と同じ様にこのハルケギニアに存在している物で、特徴はメイジが魔法を使う時に消費する精神力に似た魔力を永遠に吐き出す事が出来るためきちんとした術式で制御すれば、簡単に永久機関が作れる等の優れた性質を持っているが、その反面、デメリットも有り、魔石の魔力は人間には使う事が出来ず、制御せずに利用すると魔力が猛毒に変化し周囲に悪影響を及ぼす。昔、あるメイジが魔石の力を利用して魔法を使うとメイジの体が拒絶反応を起こし、内側から爆発した様に破裂しメイジは死亡、魔石が発する魔力は猛毒に変化し、広範囲に影響を及ぼしたため、その土地は百年ほど植物が育たなかつたらしく、この事から『悪魔の力が宿る石』、魔石と名前を付けられハルケギニアの人間には恐れられている。

ちなみに魔石の資料がほとんど無かったため、今回は流石に『全知全能』をONにして詳しく調べた。その結果、魔石を安全に制御できる術式を構築でき、安全を確保する事が出来た。

次は、航空部隊だ。

航空部隊の主力は当面、商船の護衛が中心のため海・空の両用艦だけを配備予定で、配備される艦は第二次大戦中に作られた陽炎型駆逐艦を元に再設計したアカツキ級フリゲート艦だ。

アカツキ級フリゲート艦は大型魔導機関を搭載したため煙突が無くなり、船体や艦橋も出来るだけ空気抵抗を減らす様に再設計した。

武装面では25mm連装機銃の数は変更せずに、主砲の『12.7cm連装砲』を3基から4基に、『四連装魚雷発射管』を2基から1基に変更し、空いたスペースに原作でジャン・コルベールが開発した『空飛ぶへびくん』を再設計し、名を『一式多目的誘導弾』に変え、『一式多目的誘導弾四連装発射機』として2基を装備した。

そのため、配備されればアカツキ級フリゲート艦は、ハルケギニアに存在する軍艦の中では最強の艦になるはずだ。

また、そのアカツキ級の支援を目的としたMF-1『ファーン』を配備する予定だ。

『ファーン』は第二次世界大戦の『震電』に魔導エンジンを乗せるために再設計した機体で、各性能が上がり、航続距離は魔導エンジンの影響で機体故障しない限り飛ぶことが出来る怪物になる筈だ。この航空部隊が見つければブリミル教と王軍がどのような反応をするか今は解らないが、その時はアカツキ級は新機軸の艦、MF-1『ファーン』はマジックアイテムだ、と言い訳するつもりだ。

「……だがこれはあくまで予定、問題があればプランの変更も必要かもしれないな」

私は全ての計画を書いた資料から目を離しながら、一人呟いた。

「ようやく明日から魔法を習う事が出来る。……  
そして、明日から始まるこのプランはこのハルケギニアにどのような影響を与えるのだろうか。ふふっ」

私は資料に書かれている文章を呟いた。

「空中都市『オステイア』の建設、及び『オーシア帝国』の建国について」

## 第五話 初めての魔法と異常事態

今日は待ちに待った魔法の訓練が始まる日だ。私はこの一年間、『プラン』を練りながら魔法書で基本的な事は全て頭に入っているので、予習は完璧。そして、杖との契約も済んでいる。

「レイ、今日からお前の魔法の訓練を始める。他の家では家庭教師等を付けるが、我がオーシア家では、親が子に教える事になっている。そのため、私とカナリアが教える事になる。いいな」

「本音は？」

「金が無い」

そう、オーシア家の財政はかなり切迫しているため、オーシア家の屋敷はそれほど豪華では無いが質素でありながら、どうやって綺麗に見せるか等、色々な工夫がされているくらいお金の事にはシビアなのだ。今回の魔法の家庭教師を雇わない事も、恐らくその影響なのだろう。そんな苦勞のお蔭でオーシア家は借金せずに済んでいるのだが。

「話を戻すぞ。レイ、この一年間、書庫でしつかり魔法の勉強をしたな」

「はい、父上。(すべて暗記したから、最近は『プラン』ばかり練習していますけどね)」

「それでは今日はコモンマジックだけを教えるが、その前に問題だ。コモンマジックはいくつあるかな？」

「レベテーション・念力・ライト・ディテクトマジック・ロック・アンロック・ブレイド・マジックアロー、そして使い魔召喚に使われるサモン・サーヴァントを含めて九つです」

「正解だ。ではレベテーションから始めたいと思うが、その前に魔法を使う際のコツを教える」

「コツですか？」

「そのコツとはイメージだ。魔法を使う時はその魔法のイメージを持って使わなければいけない。しっかりイメージしないと威力や効果弱くなったり、失敗したりするので、イメージをしっかりと持つ様に常に心掛けなさい。解ったな？」

なるほど、それはどの魔導書には書いていなかった。これは良い事を聞いた。

「はい、良く解りました。父上」

「解ったのなら、訓練を再開しよう。レビテーション」

父上がレビテーションを唱えると地面に置いてあった石が物理法則を無視して浮かび上がった。

「こんな感じに、石が浮かぶイメージをして、唱える。やってみなさい」

「はい、（石が浮かぶイメージ、石が浮かぶイメージ、よしー！）  
レビテーション」

レビテーション を唱えると私の身体から何かが、杖に流れるのを感じたが、その事は後回しにして魔法に集中すると、石が顔のあたりまで浮かび上がった。

「父上、出来ましたー！！」

「コモンマジックとはいえ、一回で成功するか。お前には魔法の才能が有るのかもしれない」

「父上、質問が有るのですがよろしいでしょうか？」

「何だ？」

「はい、実は レビテーション を唱えた時に、身体から杖に向かって何かが流れるのを感じたのです」

「それはメイジが魔法を使う時に消費する精神力だ。魔法を使っていれば、自然に慣れるのだろう」

その後も、魔法の訓練は続いたが、念力・ライト・ディテクトマジックを一回で成功してしまった。

「一回も失敗せずに成功するなんて凄いわね、あなた」

「ああ、我が子ながら恐ろしい才能だ」

ちなみに、母上は訓練の途中から参加して、父上と共に私に魔法を教えてくれている。

「つぎは、ブレイドとマジックアローだ」

「父上、ロックとアンロックはやらないのですか？」

「それは屋敷に戻ってからでも出来るから後回しだ」

まあ、鍵を閉めたり開けたりするだけだからな。

「ちなみに、ブレイドとマジックアローの二つは、メイジがどの系統かで色が違ってくる。火は赤色、水は水色、風は白色、土は茶色と決まっている。訓練するついでに、お前がどの系統なのか確かめる。イメージは簡単、精神力で出来た剣をイメージすればいい。ブレイド」

すると、父上の杖に茶色の刃が出現した。

「お前もやってみなさい」

「（元日本人には剣より刀がイメージし易いが、ここは無難に剣をイメージした方が良くも知れないな） ブレイド」

そう唱えると父上の様に刃が現れた。色は、

?  
金色?  
?

## 第六話 癪と父と言いつ

「……………えっと、ち、父上、この色はどの系統になるんでしょうか？」

私がブレイドを唱えると、現れたのは色が金色で長さは1メートルほど刃で、さらにその周りにはたくさん金色の粒子が浮いており、あまりに幻想的な光景について見惚れながらも父上に聞いてみた。

「………………………………………………………………………………」

返事が返ってこなかった事が気になり、父上と母上に視線を向けると、そこには目を子供の様にキラキラと輝かせている母上と、目を見開いたまま固まっている父上が居た。

父上、驚くのは解ります。そりゃ〜息子がブレイドを唱えたら、金色の刃が出てきたんだ、そんな表情になりますよ。問題は母上です。何故そんなにキラキラと輝かせてこつちを見ているんですか？身の危険を感じるんですか？

「よし、今の内に離れてくぶっ!?!」

私は母上の傍を離れようとするが、時既に遅く母上に捕まった。

「レーーーー!!ねえねえどうしてブレイドが金色なの!?!金色って何系統!?!お願いだからもっと思わせて!!!!」

それを聞きたいのは私の方です!?!それに母上、何か幼児退行していませんか!?!いつもの凜とした母上に戻ってください。そして早く離れて下さい!?!後頭部の辺りにけしからん弾力が!?!

「ちよっ!?!母上危ないです!?!にゅぶ!?!ブレイドがまだ出てます!?!」

「え?あつ!?!ごめんなさい、レイ。あまりにも綺麗だったからつい

「ついで、ブレイドで怪我したらどうするんですか?それと父上

いつまでそうやって固まっているつもりですか？」

「ん？ああ、すまない。金色のブレイドなんて見た事が無くてな。つい驚いてしまった」

私は母上の返答に呆れつつ父上に声を掛けて目を覚まさせた。

「父上にも何故金色なのか解りませんか？」

「解らん」

父上え、もうちょっとは考えてから答えて下さい。ちょっと適當過ぎませんか？・・・はあくしかし父上にも解らないとは困りましたね。系統の方も恐らく解らないと思うが、一応聞いておこう。

「父上、私が何の系統か解りますか？」

「それも解らん」

系統も解らないとなると、まずいな。これではいきなり『プラン』の変更が必要かもしれない。そう考えた私は『プラン』を変更した際、どの様な影響を受けるかを頭の中でシミュレーションし、影響を受けた場合を複数弾き出した後、それらを修正するための最適な手段を頭の中で弾き出していく。

傍に両親が居るのを忘れて。

Side:イオビス

「レイ！レイ！！・・・はあ、またこれか。こうなると当分戻ってこないぞ。どうする？カナリア」

「そう言えば、レイが長考する様になったのは書庫の使用許可を出して一か月ぐらい経ったところからですね？」

そう、レイが長考をする様になったのは書庫の使用許可を与えて、約一か月経った頃からだ。私が初めてレイが長考しているのを見た時の光景は何時までも忘れる事は無いだろう。それほど驚いたのだ。レイが居る机の上には、二つの本の山が出来ていて、その間にレイが一冊の本を開きながら考え事をしていたのだ。私はレイに近づき声を何度も掛けたが何の反応もしないうちに、叩いて目を覚まさせようとした時に、ふと開いている本が目に入り、気になった私はその本を取り、何の本かを確かめた。内容は軍事に関する物で決して三歳児が読む物ではない。私は持っていた本を置き、二つの山積みになされている本を一冊ずつ確認していった。置かれていた本は、魔法・農業・経済・行政・軍事・歴史・宗教等、種類は様々で、さらには『場違いな工芸品』も複数混ざっていた。私はため息を吐きつつ、私が居る事も気づいていないレイを見た。普通の子供なら少し喋れる様になり、親に甘えたり、遊んだりする年齢だが、レイは普通に喋り、字をスラスラと読む事が出来た。書庫の使用許可を与えたのは、絵本に飽きたから小説や魔導書を読みたいのだろう思ったのだが、レイは私の予想のさらに上をいったのだ。

「カナリアはレイの系統は何だと思っ？」

「……もしかしたら四系統とは違う新たな系統か、四系統全て  
かもしれませんね」

「……その可能性が高いかもしれんな」

金色のブレイドが一体どんな意味を持っているのかは明日の訓練で  
解るだろう。

「……あれ？父上、母上、どうしたんですか？」

漸く長考を終えたのか、満足そうなレイが私達に声を掛けてきた。  
誰のせいでこんな事になったと思っている。

「はあ〜」

漸く『プラン』を変更した際の修正案を出し終え満足した私は両親に意識を向けると、揃って此方を見ていた。

「…………あれ？父上、母上、どうしたんですか？」

そう言うと、父上が深いため息を吐いた。あれ？何かした？

「父上？母上？何かしてしまいましたか？」

そう言うと、更にため息を吐かれた。

「レイ、あなたまた長考に入っていたのよ」

うへ、またか、『プラン』に関する事を考えると、どうしてもそつ成ってしまうのだ。

「その癖は必ず治しなさい。解りましたね、レイ？」

「はい、母上」

「レイ、系統が何なのかは、明日の訓練で確かめる。いいな？」

私は、はい、と返事を返すが内心は今直ぐ自分の系統を調べたいと思っていた。

「このマジックアローを教えたら今日の訓練は終了だ、ロックとア  
ンロックは屋敷に戻って一人で訓練しなさい。では マジックアロ  
ー」

父上はそう言いながら、二十メートルほど離れた場所に魔法でのりを作りだしマジックアローを唱えると、杖の先から茶色い矢の様な物が放たれ、的に刺さった。

「マジックアローは杖の中に矢を作り、それを放つ様なイメージしなさい」

「（矢はイメージ出来るけど、私には銃弾か砲弾の方がイメージし易い。・・・杖の中に精神力を限界まで圧縮した砲弾を作り、それに回転を付けて撃ち出す！！） マジックアロー」

私の杖から放たれるマジックアロー、もちろん砲弾をイメージしたのだ。その威力は作られた的を木端微塵に破壊した。

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」」

沈黙、今この状態を示す最適な言葉はこれしかないだろう。私はイメージが違うだけでここまで威力が違うのかと驚き、父上と母上はどんなイメージをしたらこれほどの威力が出るのかと啞然としている。

あしきこと誤りよしんが

## 第七話 神と喧嘩と才能とバグ認定と贈り物と睡眠不足

マジックアローと言う名のマジックキャノン撃った後、当然の様に両親からの質問攻めに合い、何とか言い訳し納得してくれたが、疲労困憊になった私を屋敷で待っていたのは残っているロックとアムロックの訓練だったが、当たり前のように一回ずつで終わらせ、自室に戻った。

この部屋は私に書庫の使用許可が出されてから二日ほど経った日に割り当てられ、それ以来『プラン』は、この部屋で練っている。

私は机の上に杖を置き、ベットに寝転がりながら目を瞑り、訓練中に弾き出した幾つもの修正案を再確認し、特に問題が無い事が解ると、精神的に疲れていたのか眠気に勝てず、服を着たまま寝てしまった。

「・・・お・・・ん・・・！」

んんんだあれえ？もう少し寝たいのにいんん

「……！」

うっ……うっさい。

「いい加減、起きんか……！」

「だぁ……！！……人が気持ちよく寝てんのに、ギャーギャーギャーギャーウルセエんだよ……！ぶち殺すぞテメェ……！」

「何じゃと……！！……ワシが直々に起こしてやったと言つのに……！」

「喧しい……！ヨボヨボ爺のガラガラ声で起こされるより、ピチピチ美女の綺麗な声で起こされたいわ……！」

「それにはワシも賛成じゃ……！だがしかし、ワシは神じゃ……！少しは敬え……！」

「断る……！」

「かつこよく断る奴があるか……！」

「文句あかア！！！駄目神！！！！」

「有り有りじゃ！！！！小僧！！！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・すう~~~~・・・・・・・・」

その後、私が転生する直前に居た空間は、神と人間が口汚い言葉を  
使い、お互いに罵り合う空間へと変わった。

その数時間後、そこには力尽きて地面に倒れている馬鹿二人が居た。

「げほっ！・・・・で？何故、私を・・・・ここに呼んだんだ？・・  
」  
「ほっ！」

「ヒューヒュー……うつげえ！……ああ、それはな……お前が上手く……おええ……ハルケギニアで……生きているか……ふぐう！……聞かためじゃ……おえええ」

心配してくれたのは嬉しいが、私は今、あなたの方が心配だ。

「……ああ、私は幸せだよ……」

「ゴツホツ！……それは何よりじゃ……」

私は気になっていた事を神に聞いた。

「……あなたは、私に三つ以外の力を与えましたか？」

私がそう言つと、神は眉をひそめながら私の顔を見た。

「・・・いや、三つしか与えて無いが、それがどうかしたか？」

「実は、『全知全能』をOFFにしていたんですが、コモンマジックを全て一回で成功したんですよ。普通は二、三回失敗するはずですから」

そう言うと、神様が呆れた様に深いため息を吐いた。

「それは君自身の才能だ」

「魔法の？」

「魔法だけでは無いわ！！お前が今までして来た事を思い出せ、バカもん！！二種類のガーゴイルの設計とその術式、『震電』を再設計した『フアーン』と、『陽炎型』を再設計した『アカツキ級』、そして、極めつけにそれらに搭載する魔導エンジンと魔導機関の設計と制御術式じゃ！！この制御術式を作るのに、普通の人間なら百年ぐらい掛かる。そして、ワシでも二年ほど掛かるのじゃ！！！それをお前はたった二日で完璧な術式を完成させたんじゃない！！！」

「え？『全知全能』で性質や特徴以外も調べたら簡単に出来たけど？そんなに難しい物なんですか？」

「……バグキャラに認定じゃな。……おおく忘れておったわ、実は君に渡したい物があるんじゃない」

神様はそう言うと言った。懐から白い指輪を出し、私に渡してきた。その指輪には、宝石等は付いておらず、指輪全体が純白だが、内側には何かの術式が組み込まれている事が解った。

「これは？」

「それはワシが作った神具じゃ。それを指に嵌めて『換装』と言えば甲冑を装備できる。これなら急に戦闘が起きてても安全じゃ。ちなみに甲冑は、君に最適な術式と形状にしたからある程度、戦闘能力を強化する事が出来る。きっと君も気に入るだろう」

「ありがとうございます」

私は神様に感謝の言葉を言いながら、右手の中指に指輪を嵌めた。

「これで要件は全て済んだから、ハルケギニアに戻すぞ？」

そう言うと、光が私の視界を埋め付くした。

目を覚ますと私は、ベットのの上に服を着たまま寝転がっていた。私は無言で腕を挙げ、右手の中指に嵌められている指輪を確認した後、腕を下ろし呟いた。

「  
.  
.  
.  
.  
.  
.  
眠い  
.  
.  
.  
」

## 第八話 純白の甲冑と血の海と混沌

「……………眠い」

睡眠不足、今の私の状態を表すには、最適な言葉だ。神様との会話（言い争い？）が、終わってハルケギニアに戻って来たのだが、全く疲れが取れておらず、寝た気がしなかった。

そんな状態でありながら、私は神様に貰った神具を実際に使い、どのような甲冑なのか確認するために『換装』と唱えると、目の前の姿見には白く綺麗な甲冑を身に纏った私が写っており、それは何処をどう見ても『セイバー・リリィ』にしか見えず、睡眠不足が原因の頭痛がさらに酷くなった。

実は私は身体全体が女性の様になり細く、それに女顔も合わさり、女装がかなり似合ってしまうのだ。この前、母上に捕まり強制的に女装させられた時は、屋敷に居たほとんどの者が血の海に沈み、一日中铁臭かったのは記憶に新しい。

私が現実逃避していると、突然目の前に手紙が出てきたので、床に落ちる前に掴み、書かれている内容を確認した。

□

この手紙を読んでいると言う事は、神具を使用したのじやろうな。その甲冑は君の戦闘能力を約三倍ほど強化する事ができる。だが、今の君は普通の子供と変わらないから、それほど強くは無く強くなりたければ鍛錬を欠かさぬ事だ。それとスカートの下は短パンにしておいたぞ。

そして、最後にワシの感想を書かせて貰うぞ。

良い物が見れた。

神より

□

読み終えた次の瞬間に手紙を破り捨てた私は決して悪くないだろう。

そして、急いでスカートの上から手で短パンかどうかを確認した。

「うん、ちゃんと短パンだ。．．．なんで短パンを履いているだけで涙が出てくるだろうか？」

そんな事していると、トントンと部屋の扉をノックする音が部屋に響き、母上が扉を開き入ってきた。

さあ、二二二で諺ことわざのおそろいだ。

『泣きつ面に蜂』

不運や不幸が重なる事

今の現状を再確認してみよう。

『セイバー・リリイ』の甲冑を身に纏った私。

以前、私に強制的に女装させ、血の海沈んだ人達の内の一人、母上。

見つめ合う二人。

一人は諦めた様な目をし、もう一人はキラキラと子供の様に目を輝かせている。

もちろん、前者が私、後者が母上だ。

そして母上？何故昨日のブレイドの時より目を輝かせ、手をワキワキとさせながら私に近づいて来るんですか？

その後、オーシア家の屋敷は血の海となった。ちなみに今回は以前とは違う事が起こった。それはほとんどの者ではなく、全員が血の海に沈んだ事である。



「何？この混沌カオス」

## 第九話 系統魔法と修羅とプライド

私は今、父上と共に屋敷の鍛錬場に居り、系統魔法の訓練をするはずだったのだが、どうもそれは無理そうだ。

「……………父上？」

私は遠い目をしながら父上を見て、言った。

「……………何だ？」

父上は私の声に返事をした。

「……………今日の訓練は、中止にしましょう。」

私はそう父上に提案した。

「・・・・・・・・何故だ？」

父上は不思議そうに私を見る。

「・・・・・・・・本当に分からないのですか？」

「・・・・・・・・分かん」

「・・・・・・・・本当に分かりませんか？」

私はもう一度確認した。

「・・・・・・・・分かん」

どうやら今の父上は、自分の体調も分からないらしい。

「……では率直に言わせて頂きます。父上の体調が、あまり良くなさそうだからです」

「……そんな事は無い」

「自分の脚が生まれたての子鹿の様にプルプルと震えているのが、分からないんですか？……はあ、魔法の呪文は全て頭の中に入っています。ですから今日はもう休んでください。私がどの系統魔法なのかは後でしっかり父上に知らせますから」

私がそう言うと、父上は無言で頷き、覚束ない足取りで屋敷に戻って行った。

私は帰って行く父上を見ながら呟いた。

「心配してくれるのは嬉しいが、あまり無理はして欲しくないな」

まあ、父上が体調を崩した元々の原因は自分に有るのだが。

「さて、初歩的な呪文から始めましょうかね。呪文は土の『アース』、水の『ウォーター』、火の『ファイヤー』、風の『ウィンド』の四つ。……まずは父上の系統の土から始めるとするか」

魔導書にはアースは、自分の周囲の地面を操る魔法と書かれており、土系統の基本だ。

「ん〜、イメージは目の前の地面が少し盛り上がる感じで……アース」

すると、地面が盛り上がり始めたが、それは私の身長と同じぐらいの高さで止まった。私はその光景を見て、自分に系統魔法の適性がある事が分かり安堵し、盛り上がった地面を元に戻すために再びアースを唱え、地面を元に戻す。さて、次は母上の水だ。

「ウォーターは杖の先に空気中の水分を集め、そのまま維持する感じかな？……ウォーター」

そう唱え、杖を空中に突き出すと、杖の先に直径一メートルほどの水球が出来た。

「・・・水系統の適性も有り、と」

土と水は、父上と母上の系統なので、この二つに適性が有る可能性は昨日の時点で予想はしていたが、問題は火と風の系統だ。この二つは土と水の系統に、相反するため一般のメイジなら、この二つに適性はほとんど無いが、私は神様にバグキャラに認定されたから、どうなるかまったく分からない。そのため、火の系統から確認する事にした。

「え〜と、イメージは杖の先から炎を出す感じで・・・ファイヤ  
ー」

燃える物が周りに無いか確認し、杖を突き出して呪文を唱えると、杖の先から炎が出たが、イメージに問題が有ったのか、火炎放射の様になってしまい、慌てて魔法を中断した。

「ふむ、火の系統も適性有りと、しかし、イメージの仕方は要練習だな」

魔法は簡単に人を殺す事が出来る力だ、一度でも魔法の規模を間違えると、大変な事になる場合も有るからな。さて、気を取り直して最後に残った風のウインドだ。

「・・・風は他の三つとは違って、目に見えないからイメージが少し、難しいな・・・風、風・・・台風の時に吹く風で良いかな？・・・ウインド」

後の私はこの時の事を思い返す度に、『あの時、普通の風をイメージすればよかった・・・』と後悔するが、そんな事を知らない私は空中に杖を突き出し、呪文を唱えた。  
すると、杖を向けた方向に、凄まじい暴風が吹き、広範囲にその爪痕を残した。

「・・・あゝ、ここが鍛錬場で良かった・・・」

私は気づいてしまった、鍛錬場の近くに有る花壇の花が全滅してい

る事に。その花壇は花は母上が植え、とても大切に育てて物だ。

「ヤバい！ヤバい！！ヤバい！！！！ヤバい！！！！」

この場合はどうすれば……よし、ここはひとまず逃げ「レイ  
っ！！！！」

私の後ろから声が聞こえ、震えながら振り向くと、そこには修羅が  
降臨しており、笑顔（目は決して笑っていない）で私を見ていた。

「……言い残す事は？」

「……死にたくないです」

私がそう言つと、母上は二つの選択肢を出してきた。

「では、レイに選択肢を与えます。一つ目はこのまま処、・・・お仕置きを受ける。二つ目はあの白い甲冑を身に纏って、今日から一週間過ごす。さあ、レイ、どちらにしますか？」

母上、私は男です。どちらを選ぶかは既に決まっています!!



「『換装』」

「プライド？何それ？」

## 第十話 ダンゲルテール

あの暴風事件から数か月経ち、私は屋敷に勤めている者や領民達から『姫騎士』と言う二つ名を付けられた。

何故、私がこんな二つ名を付けられたかと言うと、あの事件から一週間の間、風呂に入る時や寝る時以外は常に『換装』させられ、そこに止めを刺したのが母上で、私を屋敷の外に連れ出し、領内で最も大きな街『ダンゲルク』で買い物をしたのだ。

一度、二つ名を付けられたら、それを变えるのは恐らく無理だろう。と、私はそう思い諦める事にした。まっ、二つ名がどんな物になっても『プラン』に影響は無いだろう。

だが、この数か月で既に『プラン』の変更を迫られる事態に陥った、悪い方ではなく良い方向で。

それには私の三つの能力の一つ、『不老不死』が大きく関わってくる。

魔法を使う時に消費する精神力の量は『ドット』・『ライン』・『トライアングル』・『スクウェア』によってそれぞれ違い、クラスが上がる事に精神力の量も増えていくが、精神力の容量は一人一人によって違う。しかし、精神力を過度に消耗した時には気絶することが有るのはどんなメイジでも同じなのだ。

私は何故気絶するのか気になり、その事を調べた。

その結果、精神力は生命力の一部である事が分かり、更に気絶する原因は命を守るために生存本能が精神力をこれ以上使わせないため気絶させる事が分かった。またクラスが上がる理由は、生存本能が

生命の危機に陥った時に、自身の精神力の容量を増やし、クラスを上げるのだ。

この事から『不老不死』である私の生命力は無限に有るため、その一部である精神力も無限、そのため私はどんなに魔法を使っても気絶せず、さらには『ドット』・『ライン』・『トライアングル』・『スクウェア』のみならず、『ヘキサゴン』や『オクタゴン』の呪文も覚えれば使える事が分かった。

まさにバグキャラだ。

そんなバグキャラになってしまったそんな私が、今何しているかと言おうと。

甲冑を換装し、出来る限り全速力でダングルテールに向かっている

『ダングルテールの虐殺』はロマリアがトリステイン貴族のリッシュモンに異教徒狩りを要請しさらには多額の賄賂を渡し、受諾したリッシュモンが魔法研究所実験小隊を派遣し大規模な異教徒狩りが行われた。そして、この事件は後に原作に大きく関わってくる二人に大きな影響を及ぼす。

「……………ジャン・コルベール」と『アニメス』

私はそう呟きながらダングルテールが在る方向を見る。視線の先には赤く染まった雲が夜空に浮いていた。

「くっ！！・・・やはり間に合わなかったか！！」

激しく燃える家屋、性別や年齢に関係なく殺され、道に放置された死体、まさに虐殺だ。

私はすぐに『全知全能』で生存者の居場所を探した。

生存者は三人、場所は二か所。

三人の内の一人はアニエスだが、私は距離が近い二人の生存者が居る方に急いで向かった。

向かった場所は草むらで一見、人の姿は見えないが中に入って行くと背中に酷い火傷を負った十代ぐらいの少女が子供を抱きしめているのが見えた。

私は駆け寄りながら『女神の祝福』発動させた後、少女に触れ一瞬で治し、声を掛けた。

「おい！！すっかりしろ！！背中火傷は治した、他に怪我をして  
いる所は無いか?！」

「……………いえ…他に怪我は……………いす……………」

少女は意識が朦朧としており返事も途切れ途切れだ。私は次に少女  
に抱かれている同年ぐらいの男の子に声を掛けた。

「君に怪我は無いか?」

「え?無いよ?けどお姉ちゃんが……………」

「君のお姉ちゃん怪我はもう治したから心配は要らない」

少女の容体は意識は朦朧としているものの、命に別状は無い事は能  
力を使う事で確認出来た。

「もう一人の生存者を助けて来るから私が戻るまでここから動くな。いいな？」

「・・・はい・・・」

「うん、分かった」

二人の返事を聞いた私は草むらから出て、アニエスの下に向かった。

アニエスは直ぐに見つける事が出来た。大きな怪我は負ってはいないものの、熱射病のため意識を失っており、かなり危険な状態だったため、実験小隊に見つからない様に急いでアニエスを先ほどの草むらに運び、体を冷やす等の応急処置を施した。

「さて、あの実験小隊（ゴミ共）はどうやって始末しようか？・・・  
・・・やっと来たか、遅いぞ『ジーク』、『ティア』」

私は気配がした方を向き、そう言い放った。すると、暗闇から所々細部が違う、ソリドスとレイテルが一体ずつ現れた。

「マスターの瞬動が速過ぎるんですよ。幾らレイテル達に運ばれたとしても追いつけませんよ。そうだろう、ティア？」

「そうですね、マスター。幾ら私達、レイテルが飛行能力を持っていても、速度にも限界が有るんです。さらに今回はソリドス達を運んだんです。逆に褒めて欲しいくらいですよ」

「理論的にはソリダスやレイテルも、瞬動を使う事が出来るんだけど」

私はそう言いながらジークとティアを見る。

ジークはソリダス達の上位個体、ティアはレイテル達の上位個体でそれぞれの指揮官になっており、二体の所々細部が違うのはそのためであり、他のガーゴイルに比べて性能もかなり上昇している。

さらにこの二体には、特別な機能が付いており、ガーゴイル達が形成するネットワーク全体や他の個体に対する制御や命令権限を有している。

ネットワークとはガーゴイル達をネットワークで繋げ、意識や思考

を共有させる事を目的に、私がガーゴイル達に取り付けた物で、これにより高度な連携攻撃をする事が可能になった。

「で？部隊の配置はどうなっている？」

私は話を切り上げ、今の状況を聞いた。

「はっ！ソリドスの2個小隊とレイテルの2個小隊、合わせて一個中隊が敵を包囲しており、さらにレイテルの一個小隊が上空にて待機、敵を監視しております」

「何時でも攻撃できます。御命令をマスター」

「直ちに敵を包囲、殲滅せよ。ただし隊長であるジャン・コルベールは捕まえる。以上だ」

『イエス マイ ロード』

## 第十一話 包囲と殲滅

今だ、激しく燃え上がる村のすぐ近くで十数人の男達が居り、周囲に生き残りが居ないか探していた。

この分隊は実験小隊に所属しており、この村を燃やし、村人達を虐殺した張本人達だ。

「くそっ！服に煙の臭いが着いちまったぜ。こんな任務さっさと終わらせたいぜ。まったく」

その内の一人の男が服の臭いを嗅ぎ、顔を歪ませながらそう言い放った。

「同感だ。早く帰って・・・俺はそうだな・・・酒を飲んで女を抱く。お前はどうするだ、新入り？」

もう一人の男がその意見に賛成し、任務後に何をするのか決め、集団の中で一番若い男に声を掛ける。

「任務が終わったならこんな仕事、直ぐに辞めてやる」

「へえ、どうして？」

「もうこんな汚れ仕事をこれ以上続けたくないんだ！！今回の任務だってそうだ！！疫病の蔓延を防ぐ任務のはずが、実際には村の何処にも疫病なんて蔓延していなかった、これではただの虐殺じゃないか！！！」

その言葉を聞いていた一人が呆れた様な顔をして近づき、肩に手を置いて、言った。

「何を今更、いいか元魔法衛士隊の坊ちゃん？俺達は汚れ仕事に従事してするための部隊だと、入隊した時に説明を受けただろ？それにお前は既に何回も似た様な任務に参加している。今更まつとうな人間に戻れると思ってんじゃねえよ。」

「それは……」

振り返って反論しようとしたが、出来ず、俯いた。

そう、辞めようとすれば何時でも辞める事が出来た、魔法衛士隊からこの部隊に左遷された時、入隊時に説明を受けた時、辞める機会など幾らでも有ったのだ。

男は既に底の無い泥沼に足を沈めていた、後はズブズブと泥沼に沈んで行くだけ。

何も言い返せない男を見て、笑いながら他の隊員に聞こえる様大きな声で言った。

「ようこそ、魔法研究所実験小隊（屑共の溜まり場）へ」

「『人は獣になる事が出来るが、獣は人になる事は出来ない』、と言う言葉を何処かで聞いた事が有るが・・・フツ、その言葉は正しかったな」

そこに何処からか、この場所には不釣り合いな子供の声が聞こえた。

隊員達はその声にすぐに反応し、お互いの死角を補う様に布陣し、周囲を警戒した。

「ほお〜、流石は汚れ仕事に従事する実験小隊の隊員だ。練度も豊富な実戦経験で魔法衛士隊に決して劣らない、さらに生き残るために冷徹な手段を取るその実戦的な戦闘スタイルもあいまって、その実力は相当な物だろう。もし魔法衛士隊が戦えば苦戦は必至、例え勝ったとしても、かなりの損害を覚悟しなければならんだろう」

子供の声は近くの森から聞こえ、視線を森の方に向けたが、子供の声以外にも金属が擦れ合う様な音が聞こえてきた。

「・・・だが、任務中に私語は慎んだ方が良いでしょう。『戦闘時の油断は死を招く』と言うだろうか？現に包囲されたのも気が付かなかったみたいだしな」

声の主が森から現れ、村を燃やす炎で照らされた。現れたのは炎の影響でオレンジ色に見えるものの純白の騎士甲冑を身に纏った四歳

から五歳ぐらいの少女<sup>レイ</sup>だったが隊員達はレイを見ず、自分達を包囲している騎士達に視線が集中した。

無理も無いだろう。片や年齢が四、五歳ぐらいの少女<sup>レイ</sup>、片や背の高さが二メートルほどもあり、右手に四メートルほど有る細長い円錐形のランスと左手に刀身が大盾の様に大きい大剣を装備している重装備の重騎士、どちらを警戒するかと問われれば重騎士の方を警戒するだろう。

だがその判断は間違っていた、真に警戒すべきだったのは先頭に居るレイだった。

そして、ここは戦場だ。そんな隙をレイは見逃さず、瞬動で一人の隊員の懐に潜り、ブレイドで一閃。

その隊員はその攻撃に満足に反応すら出来ず、首を斬り落とされた。

レイはブレイドを振り払うと同時に囲まれるのを防ぐため瞬動で一気に後ろに後退し、それと入れ替わる様に数体のソリドスが大剣を盾の様に構え、ランスを突き出し、突撃を開始した。

隊員達は仲間の一人が一瞬で殺され驚いたものの、空いた穴を補う様にすぐに陣形を整え、即座に攻撃魔法の呪文を唱え断続的に放つたが、その攻撃は盾として使用されている大剣に阻まれ、突撃の速度を若干落としただけで効果がまったく無く、それらを見た分隊長らしき男が隊員に命令を出した

「総員、此方を包囲している敵の一部に火力を集中させて包囲を突破、突破した後、味方部隊と合流せよ！！！」

その命令を聞き突撃してくるソリドスを牽制する組と包囲を突破する組に別れ、行動に移した。突破組は他の部隊が配置している方向に居るソリドス達に攻撃を集中させながら、近づいて行った。一方の牽制組は突撃してくるソリドスを足止めしながら、後退する突破組に続いた。

ソリドス達は包囲を崩すまいと大剣を傾斜が付くように地面に突き刺して防御態勢を取り、激しい攻撃を耐えたが、一体の大剣が攻撃により破壊され、衝撃でそのソリドスが吹き飛ばされ、更に横隣りに居た二体のソリドスに攻撃が集中し、撃破されたため、包囲網に穴が開いてしまった。

突破組が包囲が崩れた場所に近づき、退路を確保にしようとした時、ソリドスの後ろから剣を抜いた複数のレイテルが現れ、乱戦に持ち込まされ、足止めされた。その隙に他のソリドスが空いた穴を塞いだため、再び包囲されてしまった。

そして、その乱戦に、今まで足止めされていてソリドスが後方から突撃し、更にはその後ろに隠れ突撃していたレイテルも参戦したため、勝敗は決定的なものになった。

ある者はランスで突き殺され、ある者は杖ごと大剣で叩き斬られ、ある者は頭を握り潰され、ある者は胸を剣で突き刺され、ある者は首を切り落とされて、一人一人その命を落としていった。

そして、戦闘開始から数分で実験小隊の分隊は全滅の憂き目にあつた。

「他の部隊の状況は？」

レイは生き残りがいないか確認しているソリドス達を見ながら傍に控えていたジークに聞いた

「第2、第3小隊共に目標の殲滅を完了しました」

「隊長のジャン・コルベールはどうなっている？」

「ジャン・コルベールは数人の仲間と共に此処から東に有る村が良く見える小高い丘に居ますが、我々の存在に気付いておりません。そのため遠くから包囲、監視しております」

「そうか・・・で此方の損害は？」

「ソリドス八体、レイテルが四体、戦闘不能になりましたが、自動修復機能により三日から四日で戦闘可能な状態に修復出来る程度の損害です。総合的に見れば損害は軽微です」

「『クレイドル』が結構役に立ったな」

私はジークが持っている大剣に視線を移しながら呟いた。

「はい、これが無ければ此方の損害もかなりのものだったはずでしょう。しかし・・・」

「ん？どうしたジーク？」

「いや、トリガーランスが有ればもっと有利に戦闘が行えたと思うと早く配備して欲しいと思ひまして」

トリガーランスとはモンハンのガンランスが元に設計したソリドス専用装備で、直径十センチの榴弾と徹甲弾または散弾を撃つ事が出来る代物だ

「あれはまだ設計段階だから配備はまだ無理だ。だ・が・何故お前がそんな事を知っているのかな？まだ誰にも設計図は見せていないはずだけど？」

「い、いや、その・・・」

レイがジークをジト目で見ると、ジークはかくはずが無い冷や汗をダラダラと流し、どう誤魔化そうか慌てた。

「帰ったら実験台な」

「そんな殺生な……!」

## 第十二話 砲撃とジーク

「……これは仲間割れですか？マスター」

「恐らくそんな所だろう」

私はその光景を見ながら、ジークの疑問に答えた。  
今、私の視線の先にはコルベールとメンヌヴィル、二人による戦闘が行われている。

「流石は隊長と副隊長に選ばれるだけの戦闘能力を持っているな。  
二人の戦い方は素人の私にとっては良い見本だな。……さて、見物時間は終わりだ。ジーク、これを使い」

私は戦闘から目を離し、トリガーランスと一発の榴弾を『創造』し、ジークに渡した。

「・・・は？ちょっと待ってください。聞きたい事があるんですが」

「何？」

「トリガーランスはまだ設計段階のはずでしたよね？それなのに何故、此処に有るんですか？」

「設計段階なのは本当だ。今此処に有るのは『創造』したからだ」

「何故このタイミングで？」

その言葉を聞いた私は、無言で戦闘が行われている所から少し離れた場所で、その様子を見ている六人の隊員を指差した。

「二人の戦闘が終了したと同時に、奴らを吹き飛ばすためと、試し撃ちだ。」

「・・・了解しました」

「さて、・・・全員ジークから離れて待機しろ」

『了解・・・総隊長、ガンバ』

他のガーゴイルは私の命令を聞き、哀れなジークを励ましてからその場を離れた。

「ジーク、トリガーランスの使い方は解っているな？」

私の問いにジークは、はい、と返事をしながら、砲身の右側に付いているレバーを引くと、砲身が折れ、そこに榴弾を装填、装填し終えた後、砲身を元に戻してから安全装置を解除して、柄に取り付けられている赤いボタンに指を添えた。

「うん、完璧だ。それではジーク君ガンバ。コルベールを捕まえた

ら様子を見に来るから」

私はそう言い残し、その場を離れた。

「……………どうしてこんな事に」

『自業自得だ（です）』

この時、初めてネットワークで繋がっている全ガーゴイルの意見が一致した。

数分後、コルベールとメンヌヴィルの戦闘は原作どおりコルベールが勝ち、メンヌヴィルは重度の火傷を負い、更に目の辺りはさらに酷い具合なのが少し離れているこの場所からでも確認する事が出来た。

「うわ、あれは痛い」

「ティア達、ガーゴイルには痛覚は無いはずだけど？」

「痛覚は無いんですが、あの怪我を見ていると、ここ、痛みを想像してしまつと言うか何と言うか」

「何とも曖昧だがその気持ちは解る。私がまだ前世で生きていた頃、他人の男の股間に飛んで来たボールが命中し、激痛で蹲っている光景を見たら自分の物を無意識に抑えてしまったからな。……  
……はっ！？イカン、イカン、今は作戦遂行中だった。」

「ティア、ジークに撃てと伝えて」

「はい、マスター」

私がティアにそう言った数秒後、ジークが居る方向から腹に重く響く轟音が聞こえてきた。

トリガーランスから撃ち出された榴弾は六人の隊員が居る地面に着弾、炸裂し、その影響で弾殻が破碎されて出来た破片が、周囲に飛び散り、隊員に襲いかかった。

即死し出来た隊員達はまだ運が良い。生きている隊員達は内臓が飛び出したり、腕や脚が無かったりしているなどの重傷を負っており、生きている者達の呻き声が聞こえて来た。

私が榴弾の威力を確認をしているとコルベールが隊員達の元に駆け寄り止血する等の応急処置をしているが、もう既に手遅れだろう。

それに秘薬も無く、水メイジも居ないため隊員の命は絶望的だろう。生き残っても始末するけど。

さて、行きますか。

S a i d : コルベール

一体何があったんだ。

メンヌヴィルを倒して戦闘を終えた時、急に爆発音が響き、その方向から人の呻き声が聞こえ、急いでその場に近づけば、既に息をしていない部下や、内臓が腹から飛び出していたり、腕や脚を失っている部下が居り、急いで止血する等の応急処置を施したが、絶望的だ。

応急処置を施していると、パキツ、と小枝が折れる音が後方から聞こえ、反射的にその場所に魔法を放つが避けられ、接近を許したがバックステップして再び距離を取り再度、攻撃魔法を放とうと相手に杖を向けようすると、私の目の前に土の壁が地面から盛り上がり

攻撃の妨げになった。

もし、このまま攻撃すると自分に被害が及ぶため即座に止め、その場から離れて相手が来るのを待ったが、相手はどのような方法を使ったのかは解らないが、突然後ろに現れ、私の頭部を狙って回し蹴りを放ってきた。

その攻撃になんとか反応し、右腕で防ぐ事が出来たが回し蹴りの威力は普通では無かった。

ヒュッ

メキッ

強烈な回し蹴りを受けた右腕は折れその痛みで持っていた杖を落とすってしまったが、戦闘中に動きを止める事は死を意味する。さらに、敵は自分のすぐ傍に居るため、動きを止める訳にはいかない。腕の痛みをこらえ、残った左手で予備の杖を取って相手を見た、その時初めて自分が戦っている相手を確認する事が出来た。そこには白いドレスに騎士甲冑を身に纏った少女が居り、私に杖を向けていた。

「貴様は少しの間眠っておけ」

目の前の少女がそう言うと、意識は急速に薄れて行き、私が最後に見たのは地面が迫ってくる光景だった。

S a i d o u t

「小枝を踏んでしまった時はかなり焦った」

「マスターは時々、致命的なミスを犯しますよね」

ひ、否定できん。

「……ゴッホン、で、生き残りの隊員は？」

「ここに居るジャン・コルベール以外は、全員片付けました。上空で監視しているレイテルの報告では三人の生存者と我々以外、確認されていないとの事です」  
隊員を取り逃がして、今回の事を報告されると面倒な事になるから徹底的に搜索させるべきだな。

「一応、応援を送るから徹底的に搜索するように、と伝えて」  
私がそう言つと護衛のガーゴイル以外はこの場から離れ、搜索に加わった。

「それじゃ、ジークの無事を確認しに行きますか」

「無事だと良いですね」

そうだね。

「おお、ジークよ、なんて変わり果てた姿に」

ジークの状態は両腕がもぎ取れ、胴体と腰の辺りもかなりの損傷を負っていたが、致命的な損傷では無かった。

「このトリガーランスは反動が強すぎです。マスター」



## 第十三話 撤収（前書き）

お気に入り登録件数が400件を突破！！  
皆さん、ご愛読ありがとうございます。

今回は勢いで書き上げたので不自然な点があるかもしれませんが、  
では、第十三話。どうぞ

## 第十三話 撤収

作戦はほぼ完了し、今は事件の処理をしている。処理と言っても村の火が森に延焼するのを防ぐため家屋を森が無い方向に倒したり、殺された住人達を埋葬するだけだ。

私は埋葬するために少し離れた所に集められた幾つもの遺体を見ながら、後ろにいる三人に声を掛けた。

「辛いかもしれんが親に別れ言葉を言える最後の機会だ。悔いの無い様にしなさい」

そう言うと最初にアニエスがゆっくりとだが近づいて行き、幾つもの遺体の中から誰かの遺体を探し始めた。恐らく家族を探しているのだろう。

そのアニエスに遅れて残っていた姉弟が近づいて行った。

「マスター」

「ティアか。状況は？」

「焼け落ちた家屋の下敷きになった遺体以外は全て回収しました。また実験小隊の一人を発見、始末しました。そして、つい先ほどダングルテール全域の搜索が完了したとの報告が有り、次の命令を待っています」

「搜索を行っている全部隊は撤収し、この地点まで戻って来るように伝える」

「はい、マスター。それとマスターには悪い知らせがあります」

「・・・何？」

「カナリア様にばれました」

私はその言葉を聞いた瞬間、眩暈に襲われた。

「何でばれた？」

「屋敷で待機していた残りのレイテルがカナリア様に満面の笑みで脅されたそうです」

「うん、それは仕方ないね」

「帰ったらお仕置きだそうです」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

諦めてお仕置きを受けるか。・・・いや、『あれ』渡せば許してくれるかもしれない。

私がお仕置きをどう回避するか考えている間にアニエス達が家族の遺体を見つけたのか泣き声が聞こえて来た。

「既に起きているんだろう、コルベール。この光景は貴様ら実験小

隊が作った光景だ」

そう言いながら後ろを向くと、拘束術式によって拘束され、目を見開いて私を見ているコルベールが居た。

「何故、私達が実験小隊である事を知っている」

「その質問に答える気は無い」

コルベールに近づきながらそう言い、頭を掴んで無理矢理、アニメス達がいる方向に向けた。

「貴様らが誰に命令され、どんな任務と説明されたかは既に知っている。だが、例えどんな言い訳を並べようとも、貴様がどんなに後悔しても、貴様らがやった事に変わりはない！！！！」

「貴様らがあの子達から大切な物を奪ったんだ！！！！この光景をその目に焼き付けて、生涯、決して忘れるな！！！！」

私はそう言い終えた後、頭から手を離して術式を解いた。

「去れ！そして、十年後の今日必ずここに来い」

「逃がすと言うのですか、マスター！？」

「そうだ」

「なぜですか！？私は反対です！！！！このまま逃がすぐらいならあの子達に前に連れて「ティア！！！！」「ッ！？」

「あの子達の手を血で汚す訳にはいかない！！！！」

「……………了解しました」

「さっさと行け。コルベール」

「……………分かった」

コルベールは右腕を抑えながら立ち上がり森の中に姿を消した。

「私の判断は正しかったのかな？」

「私にも分かりません」

「埋葬が終わり次第、撤収する」

「イエス マイ ロード」

## 第十四話 薬と指輪（前書き）

今回もかなり勢いで書き上げましたが後悔はしていません。  
では、第十四話です。どうぞお〜

## 第十四話 薬と指輪

全ての遺体の埋葬が終わって、ダングルテルから撤収して屋敷に戻って来たのは、まだ太陽の光が射していない早朝だった。地球の時間で言えば午前四時くらいだろう。もちろんそんな時間だ。アニスと姉弟の三人はレイテルに抱えられ眠っていて屋敷に着いた後はメイドに預け、ベットで寝かせる様に指示した。

だが私は目の前に立つ二人によって休む事は許されず、屋敷の庭で正座している。もちろんその二人は父上と母上だ。特に母上が物凄く怒っており、私と母上の隣に居る父上は同じ様に体を震わせていた。

「……………レイ」

「ハイ!!!」

「私達がどれ程心配したか、貴方に分かりますか？」

「すみませんデシタ!!!」

バシン!!!

母上に謝った瞬間、左頬を強烈なビンタで叩かれた。物凄く痛いです。私が叩かれた左頬を手で押さえていると、母上が無言で抱き締めてきた。

「……母上？」

「……貴方が居なければあの子達は死んでいたのですか？」

私が居なければ、アニエスは原作通りにコルベールに助けられただろうが、あの姉弟はどうだろうか？ 姉の方は背中に重度の火傷を負っていて身動き出来ず、弟の方は自分の姉を捨てて一人で逃げれば生き残れる可能性がまだ有ったが、果たしてあの子にそんな事が出来るだろうか？ どちらにしても隊員に見つかれば生き残るのは絶望的だろう。

「……恐らくは」

「そう……良くやりましたね。レイ」

「はい！」

驚いた。もつと怒られると思っていたのに。そう思っていると誰かが私の肩を叩いた。顔を横に向け叩いた人物、父上を見た。

「カナリアの説教は終わったが私の説教は終わっていないぞ？」

あつ、父上が居たのを忘れてた。  
その後、私は二時間近く父上のネチネチとした説教を受けた。姑か  
アンタは!!!

やっと父上の説教が終わり、疲労困憊の私から離れた所で父上と母  
上の二人が私へのお仕置きを何にするか議論している。一刻も早く  
決めて欲しいものだ、かれこれ二時間近くも正座しているため足が  
もう限界だ。その痛みを我慢していると、ようやく決まったのか二  
人が戻つて来た。

「お仕置きは三つに決まったわよ。レイ」

「その三つとは？」

「まず一つ目は、今も身に纏っているその甲冑以外にも違う服で常  
に女装する事。期間は四ヶ月」

「四ヶ月!？」

「はい次、二つ目はオーシア領の海沿いの地区、ジェーラ地区とオーシア諸島とノースメインランド島を統治する事」

「統治！？まだ四歳ですよ！！」

「レイだから多分大丈夫。そして、最後はノースメインランド島の亜人及び幻獣を討伐しノースメインランド島の安全を確保する事。もちろんガーゴイル達は使って良いわよ」

「一つ目以外は、自分達が楽をしたいからでは？」

私がそう指摘すると、二人揃って目を逸らした。

「分かりました。やらせて頂きます。ですが、一つ目の女装だけは無し「ヤダ」……………」

落ち着けえ、私、ここで怒ってしまえば逆に期間が長くなるかもしれません。やはりここは『あれ』を使うべきか。

「母上、今までとは違う新しい秘薬を差し上げますので女装の方は無かった事に……………」

ピク

お、反応した

「新しい秘薬？そんな物を作ったのですか？」

「はい。その秘薬を使えば母上の願いも叶います」

ピクピク

あ、さっきより反応が

「その秘薬は何と言う物なのですか？」

「その秘薬の名前は………豊胸薬です」

ピシャーン！！

はい、ヒットオー！！

母上の胸のサイズは、大体BカップかCカップぐらいの大きさで、  
たまに隠れて胸が大きければと落ち込んでいる事を私は知っていた  
のだ。

「こ、効果の方は？」

「個人個人によって効果は少し違いますが、用法用量をしっかりと守  
って朝昼晩に分けて一日三錠を一ヶ月間飲み続けれ2倍か2.5倍  
くらいは」

「女装のお仕置きは無しにしますから早く下さい」

「今は持っていません。私室の金庫に保管しています」



「この薬を売るのが？」

「いえ、普通には売りません。一ヶ月に一人分だけオークション形式で売ります」

「なるほど、オークションで売れば薬の値段は勝手に上がって行くな。・・・それで得たお金をお前はどうするんだ？」

「統治のための資金にしようと思います」  
「お金が無いと何もできないからね」

「分かった。宣伝しておこう」

「ありがとうございます」

「で？・・・お前まだ違う秘薬を隠しているんじゃないか？」

「ワオ！！父上、なかなか鋭いですね。」

「はい、完成しているのが二つ、今現在、製作中の物が一つ」

「薬の名前は？」

「一つ目が『廃人確定！』さあ、全てを吐き出そう。超強力自白剤』  
で二つ目が『君は何時まで生きるかな？人類の夢、不老の薬』です。  
今作っているのが『幻獣が人間になったらどんな姿になるのか見て  
みたい。擬人薬』です」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

おや？お二人が遠い目をしているぞ？まあ、当たり前前反応か。普通  
の人はそんな薬は作れないからな。

「不老の薬と言うのは本当か（ですか）？」

やっぱり不老の薬に食いついたか。私はそう思いながら金庫から同  
じ色をした丸薬を二つ取り出した。

「これが不老の薬ですが、これには副作用が有って、子供が出来き  
難くなります」

「でも絶対に子供が出来ないと言う事は無いのよね」

「はい」

私が母上の問いに即答すると、二人はお互いを見てから丸薬を飲み

込んだ。が、飲み込んだ直後二人の顔から血の気が消えた。当然の反応だ、この薬は素材の問題で物凄く不味いのだ。二人はこちらを見て目線で訴えてきた。

「（盛つたな）」

「いえ、ちゃんと不老の薬です」

それから数分経ち、地獄が終わった二人は床に震えながら倒れ伏していた。そうだ、念のため二人には釘を刺しておかないと。

「豊胸薬以外は絶対誰にも言わないくださいね」

「……………」

反応が無い

「もし喋ったら同じ味がするキャンディーを作って飲ませるから」

サッ！ ゲツ！

私がそう脅すと二人とも先程とは違って、震えながらも即座に片腕をこちらに向け、手を握り締めて親指を立てた。

私はその反応に満足し、今まで隠していた秘宝『炎のルビー』を取り出した。これは気絶した時にコルベールから取り上げた物だ。そ

れを掌に乗せ

メキッ！バリッン！！

握り潰した。

この二ヶ月後に第一回豊胸薬オークションが行われ、一人の女性が喜び、何人もの女性が落ち込んだが、一ヶ月後に再度開催されると聞いて、つぎのオークションで絶対に薬を購入する事を決意した。なお、今回購入する事が出来た女性はラ・ヴァリエール公爵夫人だった。

## 第十五話 予想外

「あゝ、ダンゲルクに行った時もそうだったが、道がデコボコだ」

「私はその時、まだ作られてませんから知りませんが、確かにこれは酷いですね。これで雨が降ったら最悪ですね」

私は馬でガーゴイル達は徒歩でジエーラ地区に向かって行軍しながら領内の道がどんな状態か確認していた

「やはり公共事業で道路の整備が必要だな」

「それはそうですが人手が足りるとは到底思えませんか?」

ちなみに今回はジークは先の殲滅戦の損傷のため五日ほど戦闘不可のため屋敷で待機している。

「足りなければ連れてくれば良い」

「奴隷でも買うんですか?」

「確かに奴隷を買うと言う選択肢も有るが『塵も積もれば山となる』だ。それなりの奴隷を集めようとすればかなりの資金が無くなってしまつし、常に見張りを付けて置かなければなら。我々の一体どこにそんな余裕が有る?」

統治を任されたため父上から軍資金を貰ったがあまり財政状況が良くないオーシア家だ。その額も決して多いとは言えず無駄遣いは出来ない。

「ならどうやって人手を集めるんですか？」

「失業者または浮浪者を集めるつもりだ」

「しかし、それでも人手が足りるとは思えません」

やはり文官型のガーゴイルを作るべきか？戦闘型のガーゴイルは頭が少々硬い。

「確かにオーシア領内から集めても足りない。なら外から連れて来ればいい」

「外？」

「王都トリスタニアだ」

「何故王都に？王都より近いところの街で探せば、他の貴族が治めている街でそんな事が出来る訳が無い。領民を連れて行けばオーシア家とその街を治める貴族との関係が無駄に悪化させるだけだ。それだけは避けなければいけない」………

「王都が一番平民が集まるが、その分失業者や浮浪者が多い、その結果、王都トリスタニアの一部がスラム化する事になり、犯罪の温床となって代官達を日々悩ませていると聞いている。そんな王都なら勝手に連れて行っても代官の怒りを買って可能性はかなり低い。それに最近はトリステインの政治・経済・外交を一手に引き受けていたエスターシュ大公が失脚した影響で、トリステインの経済が下降気味になって来ているから、増々失業者が増えていくだろう」

「統治の事はマスターに任せて、私は戦闘に専念する事にします」

「その方が良さそうだ。……………はあ、文官型を真面目に検討するか」

しかし、文官型か。一から設計・製作するか、レイテルを基に発展型を作るか、どちらが手間が省けるだろうか。

そんな事を考えていると目的の村が見えてきた。

「あれがアーボオラ村か」

アーボオラ村はジェーラ地区に在る三つの村で一番大きい海の近くに在る村で、父上の話では主な産業は農業・酪農の二つで漁業はそれほど盛んではない、その理由は他の村に運んでいる最中に魚が傷んだり、腐ってしまうからだと言われた。

運送に関しての問題は、その話を聞かされた時に前世のクール宅急便をヒントに解決したのでそれほど問題ではない。

話を聞いた後で適当に作った試作品のマジックアイテムを、一辺一メートルほどの正方形の箱に入れると箱の中の温度が下がっていき、5 ぐらいの温度で止まってそれ以上、下がる事は無く維持された。このマジックアイテムを荷車に作った箱に取り付けければ、生ものの運送に適した手段の完成だ。

話が逸れたな

「私達は護衛を除き村の外で待機でしょうか？」

「このまま村に入ったら村人達の不安を無意味に煽ってしまうだけだからな。そうするとしよう」

「これだけの数ですからね」

「そうだな」

意見が一致した私とティアの二人は後ろ振り向く。今まで自分が進んでいた道はガーゴイル達によって埋め尽くされていた。

今回の目的はノースメインランド島の亜人及び幻獣の討伐作戦のため、ソリドスが3個中隊、レイテルが3個中隊、合わせて1個大隊を今回の作戦遂行のために投入する事にしたのだ。

「やはり多すぎませんか？」

「最近、飛竜の群れが住みついたと言う情報が入ってきたし、ノースメインランド島はかなり広いらしいからこれでも足りるか不安だ。

だから今回はティアに指揮を任せて、私はその後ろで戦力を増やす事に専念しようと思う」

「ネットワークを使って地図も作成しなければいけませんね」

「何処に何かがあるか知っておかないと開発出来ないからな」

「……いつその事『国境なき軍隊』の演習場に使いませんか？」

「非常に魅力的な提案だが、まずはどんな場所か確認しなければ決められん」

討伐後の方針を話し合っていると村の近くまで来たので護衛以外は待機させ、村の入口に近づくと顎に立派な白髭を生やした老人が私達を出迎えた。

「貴方がアーボオラ村の村長ですか？」

「はい、私がアーボオラ村の村長を務めさせて頂いているカールと申します」

「私の名前はレイ・レナード・ド・オーシア、オーシア家の嫡男です。父上の使いから話は聞いていますね？」

「はい、存じております。今までの代官と代わってジエーラ地区を治めるそうです」

「確かにそうですが、今回はその事で来たのではないのです」

「それはどう言う意味で」

「今回、ジエーラ地区に来た目的はノースメインランド島の亜人や幻獣を討伐するためだ」

「そうですね。だからあれほどの兵を」

私の言葉にカール村長は納得し、道を埋め尽くしているガーゴイル達を見た。

「カール村長、開けた場所が有るならそこに案内してくれないか。ガーゴイル達が道を塞ぐ様な状態になってしまっていますから」

「この村の周辺はほとんど畑ですので、砂浜しか開けた場所がありませんがそこでよろしいでしょうか？」

「大丈夫です。ティア、行軍を開始しろ」

「イエス マイ ロード」  
ティアがネットワークで命令すると、ガーゴイル達は行軍を開始した。

「・・・あれがノースアイランド島・・・デカいな・・・」

「ええ、予想外の大きさですね」

村長に案内され、到着した砂浜からノースアイランド島を見る事が出来たが、その大きさに唖然とさせられたが、村長にさらなる過酷な現実を突き付けられた。

「ここから見ても十分大きいですが、本当はもっと大きいですよ」

「は？」

「実はあの島はこの浜に向かってだんだんと細くなっておりまして、此処とは違う場所から見ればもっと大きく見えます。では、私はこ

れで失礼します。ご武運を「

「ああ、ありがとう」

私がそう言つと、村長は砂浜を離れ、村に帰って行った。

「屋敷に待機中の全部隊を大至急動員！！レイテルだけで偵察隊を編成、すぐに島の大きさを確認させる！！！！なお、偵察隊を島には絶対降下させるな！！！！」

「イエス マイ ロード ……！！！！」

この数時間後、偵察隊から島の情報が私の元に届いた。

島は大陸に在るオーシア領の四割に届くほど広大で、亜人や幻獣も相当数確認されたが、そんな亜人や幻獣が小さく思える様な報告が入ってきた。

『島に住み付いているのは飛竜の群れではなく、火竜の群れである事を確認。群れの数は十頭以上が確認出来たものの、詳しい数は不明』

最悪だ。

## 第十六話 何故？（前書き）

更新が遅れて申し訳ありませんでした。

実は二週間前に既に出来ていたのですが、何故か消えてしまい、再度思い出しながら書いたためです。

そのため間違いがあるかもしれませんが、ご勘弁ください。

そして、お気に入り登録件数500件を突破、ご愛読ありがとうございます。でございます。

では、第十六話をどうぞ。

## 第十六話 何故？

既に討伐作戦開始から五日が経っていた。

今討伐作戦は順調に進み島の八割を制圧するに至ったが、こちらも戦闘により一個中隊規模の被害を受けており、作戦終了まで決して気を緩める事が出来ないでいた。

そして、今、私が何をしているかと言うと島の中央部に敷いた拠点に張られているテントの下で父上に提出すると命令されている『ノースメインランド討伐作戦』の四日分の報告書を不備が無いか再確認している所である。

なお、作戦開始時の戦力は1個大隊だったものの、進軍し前線が拡大するにつれ必要な戦力も増えたため、現在では3個大隊にまで膨らんでいた。

「あゝ、疲れた。早く作戦を終わらせて帰りたい。そう思わないか？ ティア」

私は今まで確認していた報告書を机の上に置き、指で目頭を揉みながら自分の後ろに控えていたティアに愚痴を呟いた。

「私達はあまりそうは思いませんが」

くっ。よもやこんな身近に裏切り者が居るとは。

「あそつ……そういえば私が統治を任されたジェール地区、オーシア諸島、ここノースメインランド島を合わせた面積についての報告書が上がって来てたけどティアは確認したか？」  
実は今作戦が開始される前夜からレイテルのみで編成した大規模な空中偵察隊を飛ばし、上空から情報を集め、その情報を基に地図を作製させていて、精度はあまり良くないもののこの世界では高精度の地図が昨日ついに完成し、統治を任された地区の総面積が分かったのだ。

「はい、確認しましたが何か問題でも？」

うん、報告書には一切何も問題は無かったよ。でもね

「何故、統治領の割合が私の所が六割で、父上の所が四割なんだ！！あまりにも広すぎる！！！」

「その主な原因はこの島でしょうね。ですがこの島のお蔭でかなりの収入が期待できます」

「……そうなんだよね」

実は幻獣や火竜は出来るだけ討伐せず捕獲する方針を取っており、現時点で火竜やグリフォン、ヒツポグリフ、ユニコーン等、合わせればかなりの数を捕獲しており、屋敷へ帰還した後、ユニコーンは王家に、火竜は王軍の竜騎士隊に、グリフォンとヒツポグリフは魔

法衛士隊に売却し、軍資金をさらに増やすつもりだ。

ちなみに肉食系の幻獣には、首に特別な術式を組み込んだ首輪を付けて攻撃させないようにしてから檻に入れて大人しくさせている。

「とにかく、帰ったらあの激不味キャンディーを無理矢理、父上の口に捻じ込んでやる。……………で、現在の進捗状況は？」

「第2、第3大隊は既に進軍を開始、恐らく昼頃には北部に残った亜人達を掃討できると思われ……………マスター、第二大隊所属第31小隊から報告」

「報告？」

「ハイ、傷を負って動けないユニコーンの亜種を発見したとの事です」

「は？亜種？ユニコーンの亜種なんてバイコーンしか居ないだろう」

「それが何でも電気を纏っているらしく、捕獲して治療しようにも近づくと雷を落としてくるらしくまったく近づけないそうです」

「……………それ、明らかにユニコーンじゃなく、モンハンのキリンだよな？……………分かった、暇潰しついでに助けて来るとしよう。場所は？」

私がティアに詳しい場所を聞くと、ティアは机の上に置かれている地図に近づき、ある場所を指した。

「この陣地から北北東に十二リーグほど進んだ場所に在るこの林です。林の上空でレイテルが待機させておきますので、行けば直ぐに分かります」

ティアから場所を聞いて直ぐ、瞬動で向かった。

目的地である林に着くと、小隊長のソリドスが私を出迎えた。

「お待ちしておりました。マスター」

「お勤めご苦労、すまんが今直ぐ案内してくれ」

「分かりました。此方へ」

そついう言つと小隊長は林の中に入って行ったため、自分もその後に続いて林に入った。それから少し歩くと、骨が折れており左の後ろ脚が普通ではありえない方向に向いており、立てないため地面に横になり、首だけを起こしてこちらを見ているキリンを見つけた。

そう、どこからどう見てもユニコーンではない、間違いなくキリンだ。モンンスターハンターの。

何故この世界に存在しているのだろうか？この世界は地球だけではなく、モンハンの世界とも繋がっているのだろうか？……  
……今度、機会があれば神様に聞いてみるか。何時になるかわからないけど。と言うか、一体どんな奴がキリンにこんな傷を負わせたんだ？

「まあ、助けるとしますか」

そう呟きながら、騎士甲冑に換装し、近づいて行ったが、キリンとの距離を十メートルほどに詰めると、足元が白くなり慌ててサイドステップで横に移動してみると、先程まで歩いていた所の近くに在った岩に雷が落ち、内部の水分が水蒸気爆発を起こしたのか、岩が複数に割れた。

「……捕獲すべきか、討伐すべきか。……できれば捕獲したいが」どうするかだな」

私はそう考えつつ、次々と落ちてくる雷を確実に躲し、これ以上の接近を危険と判断、一気に後ろに後退した。すると小隊長が私の所に駆け寄ってきた。

「危険な行為はお止め下さい。マスター」

「ヤダ」

「子供の様に駄々を捏ねないでください!」

「子供だからね!!!四歳だからね!!!」

「ただの四歳の子供が私達を作れるはずが無いでしょ!!!マスタ  
ー!!!!」

むう、確かにその通りだ。このままでは不利だな。……よし。

「さあ、どうやって捕獲しようかな」

「露骨に話を逸らそうとしないで下さい!!!」

「ちっ」

「舌打ちされた!」

後ろで何か騒いでいるが、まあ無視する事にしよう。とにかく今はキリンをどう捕獲するかだ。さっきと同じ様に近づいて落雷を躲かしていき、うまく接近出来てキリンに触れようとしても躰に電気を纏われると触れる事が出来ない。やはりここは眠らせてから治療・

捕獲がベストか。

ここはやはりスリープ・クラウドを使うべきだな。

「スリープ・クラウド」

キリンに杖を向けながらそう唱えると、杖の先からうつすらと煙が流れ出てキリンを包み込んだが、あまり効果は確認出来ないかったため、引き続きその状態を保って四十秒ほど待つと効果が出て来たのか起こしていた首が徐々に下がりだし、そして、地面に首が下りた。

「漸く眠ったのか？」

私は警戒しながらゆっくりキリンに近づき、距離を詰めていった。

十五マイル

十マイル

五メール

四メール

三メール

二メール

一メール

此処まで近づくと、キリンの寝息が聞こえたため、警戒を解いた。恐らくこちらが攻撃しない限り寝ている間は安全だろうし、ゲームではすぐに起きてしまうが、その可能性も低いだろう。

『女神の祝福』を発動させてから、キリンを起こさない様に触れると、折れていた後ろ脚がゆっくりと正常な位置に戻って行くが、此処で予想外な事態が起きた。

ゴキッ！！メキ！！ゴリ！！

と、骨が元に戻る音が大きく響き、後ろ脚が少し跳ねた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

冷や汗をダラダラと流しながら無言で視線をキリンの後ろ脚から顔に向けて、ルビーの様に綺麗な紅い瞳が私に向けられていた。



その後、キリンと戦闘を繰り返したのち、何故か気性の激しいはずなのにかなり懐かれた。

ホントに何で懐かれたんだろ？

第十六話 何故？（後書き）

次回は出来る限り早く投稿したいと思います。

第十七話 地獄のキャンディー（前書き）

今回はかなり短いです。

## 第十七話 地獄のキャンディー

ノースメインランド討伐作戦は作戦開始の五日後に島の全域を制圧したものの、討ち漏らした亜人等が居る可能性も有り、第三大隊が一ヶ月間この島に駐留する事に決まった。

また、第三大隊の他に、私が戦力拡充や報告書の製作の合間を縫って用意した土木関係に特化させた新型ガーゴイル『グラント』で編成した施設中隊と、その護衛の第二大隊所属の第十一中隊を駐留させ、この島にどんな資源があるか調査させる事にした。

なお、施設中隊にはディテクトマジックをマジックアイテムで再現出来る様にした地質調査の機材を配備した。

「父上、ノースメインランド討伐作戦を無事終了し、只今戻りました。そして、これが今作戦の報告書です」

私は今まで乗っていたディオネから降り、ディオネと捕獲された幻獣達や火竜を見て顔を引き攣らせている父上に帰還の報告をした後、報告書を手渡した。

ちなみにディオネとは、私に懐いたキリンの名前だ。

「あ、ああ、ご苦労。疲れたらもうから休むと良い」

「はい、父上、ですがその前に捕獲した幻獣達を鍛錬場に移してもよろしいでしょうか？」

ここは屋敷の正面の庭、このまま置いておく訳にはいかない。せめて屋敷の裏にある鍛錬場に移動させた方が良い。

「別に構わんが長期間鍛錬場を使えないのは困るぞ」

「一応、この幻獣達は後日、王家や魔法衛士隊、そして火竜達は王軍の竜騎士隊に売却しようと思っています」

「今後の予定を決めていたようだな。だが売却する場合は私も必ず同伴する」

「父上もですか？」

「子供のお前だけで行っても安く買い叩かれる可能性が高いぞ」

「なるほど、ではその時はよろしくお願いします。父上。ああ、報告書以外にも父上に渡す物が有りました」

「そう言い終えた後、ティアから円柱状のケースを受け取り、作戦中に作成した地図の写しを取り出して、父上に手渡した。」

「これは作戦中に作成したジェーラ地区とオーシア諸島、そしてノースメインランド島の詳細な地図です」

「これほどまでに正確な地図、今まで見た事が無いぞ!!!い、一体どうやってつくったのだ!!!」

「まあまあ、落ち着いてください父上。その前に統治領の割合で父上に話が有ります」

「返答しだいでは地獄を味あわせてあげます。」

「統治領の割合？」

「はい、その割合なのですが父上の領地が四割、私の領地が六割な





「マスターが怖い」

失礼な

第十八話 発展と『プラン』の第一段階（前書き）

今回はかなり時間が進みます。

## 第十八話 発展と『プラン』の第一段階

討伐作戦が終わり、捕獲した幻獣や火竜の他に錬金で作った宝石の売却により増えた軍資金を基に本格的に統治を開始してから約三年経ち、アーボオラ村から北に三リーグほど離れた所に建てたジェーラ地方庁舎を中心に各役所や大衆浴場、公衆便所等の公共施設やオーシア領や王都トリスタニアから連れて来た領民の家々や商店等が建ち並ぶ住宅街が作られ、道路も公共事業で整備され大通り以外の道も将来の配慮し道幅が広く取り、道路に沿って街路樹等も植えられ、路面は石畳によって舗装されている。

また、少し離れた海岸線では二年前から公共事業で小さく廃れていた港を貿易等を行える様に大規模な工事が行われおり、倉庫群等の港湾設備も含めて順調に進めば一年後に完成する予定だ。

さらに工事中の港の直ぐ近くではグラント達が造船所や製鉄所の建設を港の工事と同時期に始めており、造船所は二ヶ月後、製鉄所は十ヶ月後の完成を目指しているが、徹底した警備やシート等で見ることが出来ない様になっているため、領民にはこれらがどの様な施設かは知らない。知っているのは私が絶対の信頼を寄せるごく一握りの人間だけだ。

なお急激に街から都市へと発展を遂げたこの都市は『ローゼンタール』と命名された。

治安面ではローゼンタールの急激な人口増加に伴い、犯罪数も増加したため警察機構の創設が急がれていたが、隊員達の教育や訓練がまだ不十分なため直ぐには創設出来なかつたため、当初は『国境なき軍隊』に依頼し、犯罪の取り締まりを行っていたが、二か月前、漸く隊員達の教育や訓練が終了し創設された。そして、現在、警察学校では既に第二期生の訓練が行われており、第三期生の募集も開始されている。

農業面では父上と母上に許可を取った後、オーシア領内全ての農村で農業改革を推し進めた事により、収穫量を目に見えて増やす事に成功したため、私財を投じて創業したオーメル商会が長期保存が出来ない作物を買い取った後、発展に伴い急激に人口が増加しているローゼンタールで販売し、長期保存が可能な物はオーシア家が積極的に買い取り、飢饉に備えるために食糧貯蔵施設に貯蔵する事になった。

資源面では地質調査を行った結果、ノースアイランド島には石炭や鉄鉱石、オーシア諸島では銅やチタンを中心に十数種が埋蔵されている。またこれらの鉱物は神の仕業なのか幾ら採掘してもその分が翌日には元に戻っており、恐らく幾ら採掘しても無くなる事は無いだろう。

やり過ぎだ、あの爺。

まあ、ここまで急激な発展をすると色々と面倒な事態が起こったりする。その中で最も面倒な事態は一ヶ月後に国王夫妻がここジェーラ地区に、視察しに来る事である。

視察自体はそれほど面倒ではないのだが、視察する日が半年前から企画していた花火大会の開催日と重なったためだ。

この知らせを受けた翌日、ジェーラ地方庁舎内の会議室では、オーシア家の他にも各部署の責任者達を交えた会議が行われ、多少反対意見が有ったものの開催日の日程は変更せず警備体制を変更して対処する事が決定した。

会議が終わった会議室では私と父上以外は退出し、仕事に戻って行った。ちなみに母上はローゼンタールの郊外に建てた私の屋敷に居

るアニエス達に会いに行った。なお、母上のバストサイズは三年前、今ではローゼンタール発展の資金源の一つとなっている『豊胸薬』の服用によりDカップまで大きくなっていた。

「父上は王家の旗とオーシア家の旗を出来るだけ揃えて貰えますか？」

「分かった。足りない分は倉を開放してでも揃えよう」

「いいのですか？」

「お前のお蔭でオーシア家の財政は潤っているからな。これぐらいの出費など構わん。お前の方こそ警備の方は大丈夫なのか？」

「当日は『国境なき軍隊』と警察の共同で警備させる事が既に決まっておりますし、警備体制の変更もすぐに出来ます。心配はいりませんよ」

「警察・・・ああ、あの治安維持を主眼に置いた軍隊だったな」

「警察は軍隊ではありませんよ。父上」

「そう言う事にしておこう。・・・むう・・・」  
父上はそう言う手で顎を触りながら考え始めた。

「父上？」

「実はある権限をお前与えようと思ってな」

「権限？」

「ジエーラ地区における領軍の指揮権だ」

「良いのですか？」

「何事も経験だ。それに私としては警察を創設したお前が一体どのような軍を作るか見てみたい」

「分かりました。オーシア西部方面隊の創設計画が纏まり次第、創設に向けて訓練を開始します」

「オーシア西部方面隊か、創設されれば『プラン』の第一段階は達成だな」

「はい、父上」

私が同意すると父上は席を立って、外の街並みが見える会議室のガラス窓に近づき、外を眺めた。

「しかし、たった三年で良くこれほどまでローゼンタールを発展させたな」

「私一人の力ではありません。領民達が居るからこそここまで発展できたんです」

「そうだな。だがそれを理解せず奴隷の様に搾取する貴族がこの国には多すぎぬ」

「……このまま進めばトリステインは確実にゲルマニアかガリ

アによって滅ばされるでしょう。ですが私は共倒れするつもりはありません」

「当たり前だ」

『プラン』 第一段階完了まで、あと一年

トリステインからの独立まで、あと十七年

## 第十八話 発展と『プラン』の第一段階（後書き）

因みにプランについては両親共に知っています。  
アニメス達は今後どう登場させるか、悩んでいます。

## 第十九話 ローゼンタール（前書き）

皆様のお蔭でお気に入り登録件数が600件を突破、ご愛読ありがとうございました。

では、第十九話 ローゼンタール をお楽しみください。

## 第十九話 ローゼンタール

国王夫妻のジエーラ視察の知らせから丁度一ヶ月経ち、歓迎や花火大会の準備が無事終えたローゼンタールは今までにないほど熱気に包まれており、既にお祭り騒ぎだ。

国王夫妻が通る大通りにはトリステイン王家の旗とド・オーシア家の旗が並び、ソリドスと警官が背面警備で警備に当たっていた。また、ジエーラ地方庁舎の他に、各行政機関の庁舎に囲まれている中央広場では警官隊が赤い絨毯を挟んで休めの状態で待機していた。最初は自衛隊の特別儀仗隊を真似て、銃剣を装着させたミニエー銃を持たせようとしたが会議で私以外全員が反対し却下された。

理由はあまり威圧感を与えるのは良くないと事だった。だが会議中に母上が今度創設されるオーシア西部方面隊でその部隊を創設すればいいのでは、と意見するとそれなら、と一人を残して賛成に回り、承認された。

なお、唯一反対したのは後のオーシア帝国初代財務長官に任命される人物だった。

一ヶ月前の出来事を思い出していると、何発もの祝砲が鳴り響いた。国王夫妻到着の合図だ。

数分待つと、中央広場まで歓声が聞こえて来た。頃合いと思った私は警官隊の指揮官に右手を挙げて合図した。ちなみに私の今の服装は白手袋以外はスーツやネクタイは全て黒で固めている。

母上には騎士甲冑に換装して歓迎すれば良いのに、と言われたが、全力で拒否した。

私の合図を見た指揮官は号令を掛けた。

『全隊！！！！ 気を付けえ！！！！』

ザッ！

号令を受けた警官隊は一糸乱れず休めの状態から直立不動の状態に変わった。

『右へえ倣え！！！！』

この号令をしていないと列がずれていたりするからな。

『直れ！！！！』

『休め！！！！』

そう号令すると、一斉に腕と顔を元の位置に戻した。集団が一糸乱れず動いているのを見るのは気持ちが良い物だ。

そんな事を思っていると、中央広場に護衛に就いているグリフォン隊と国王夫妻を乗せた王家の家紋が入っている白い馬車が現れ、中央の噴水を回って此方に近づく。馬車が止まり、グリフォンから降りた一人の隊員が扉を開けると国王が馬車から降り、此方を見た。

さて、今日一日頑張りますか。

『全隊！！！！ 気を付けえ！！！！』

指揮官の号令が中央広場に鳴り響いた。

S i d e : 国 王

今日は妻のマリアンヌと共に発展の著しいド・オーシア領のジェーラ地区の視察だが、それは表の理由で、本当はただの休暇だ。

アルビオン王家から入り婿としてトリスティン王家に入り、先王亡き後、国王の座に即位し私の右腕であるマザリーニと共に衰退していくこの国を何度も変えようとしたが、その度に宮廷貴族等に邪魔をされた。

気付けば常にこの国をどう改革するか考える様になっていた時、マザリーニに体を休める様にと言われた。

そう言われ、此処の所政務から離れマリアンヌと共にゆっくり過ごした記憶が無い事に気が付いた。マザリーニの記憶ではゆっくり休暇を取ったのは三ヶ月前との事だった。

だが、休暇を取って休んでみても政務の事が頭から離れず、疲労が取れた気がしない、とマザリーニとマリアンヌに相談してみると、マリアンヌに宮殿から離れて旅行にでも行きませんか、と言われたが私自身あまり賛成出来なかった。

理由は、重要な政務や貴族達とのパーティー等で一ヶ月先予定が埋まっているのと、これ以上休んでしまうとマザリーニの仕事量がさらに増えてしまうからであった。

だがマザリーニがマリアンヌの意見に賛成し、今回の視察と言う名の旅行が決定したのだった。

はあく、と大きな溜息を吐いた後、馬車の窓を開けて護衛の任に就いているグリフォン隊の隊長を呼び寄せた。

「お呼びでございますか？陛下」

「ローゼンタールにはあとの位で着くのだ？」

「オーシア領の検問所が此処からでも視認できていますので、このまま行けば二時間ほどで到着出来るでしょう」

「分かった。引き続き護衛を頼む」

「命を懸けて必ずお守り致します。陛下」

私が頷くと、隊長は元の位置に戻って行った、それを確認した後に窓を閉じるとマリアンヌが声を掛けてきた。

「視察の間はしっかりと体を休ませて下さいね。貴方」

「分かっているさ、マリアンヌ」

そう返事を返し、私は窓から外の草原を眺め始めたが、オーシア領の検問所を抜けると景色が徐々に変わり始め、農地が広がっていた。マリアンヌと話しながら外の風景を見続けていると、祝砲の独特な破裂音が聞こえたので、窓を開いて隊長を呼び寄せて聞いてみるとどうやらローゼンタールに着いたらしい。その間にも祝砲が鳴り響き、歓声が聞こえて来た。

その後、大通り通ってジェーラ地方庁舎に向かったがその途中で幾度も目を見開いて驚いた。大通りは王都に比べ、道幅が広く取られ、木が植えられていた。そして、何より最も驚いたのがゴミや汚物の

匂いが王都では何時も閉めていた窓を全開にしても全く臭いがしなかった事である。

これにはマリアンヌやグリフォン隊、そして女官達も驚いていた。

驚きながらも民に手を振っている内に、ジェーラ地方庁舎の前にある広場に馬車が止まり、隊長によって扉が開かれ、馬車を降りると目の前に広がる光景について固まってしまった。

そこには赤い絨毯の左右に同じ服を着た者達が直立不動で三列横隊で並んでおり、その向こうにド・オーシア伯爵夫妻とこのジェーラ地区を統治している嫡男の姿があった。

まさか、こんな様な歓迎の仕方をされるとは思わなかった。

そんな事を考えていると突然、大きな声が鳴り響いた。

『全隊！！！ 気を付けえ！！！！』

すると彼らが一系乱れずに直立不動の姿勢を取った。

『国王夫妻に対し 敬礼！！！！』

その号令を受け、今度は一系乱れずこちらに挙手の礼を行った。

私はその一系乱れぬ集団行動を行える組織が気になったが、それは後で聞けばいい、そう考え歩を進めた。

さて、今日一日頑張って、明日から思いっきり羽を伸ばすとしよう。

第十九話 ローゼンタール（後書き）

ちよつとマリアンヌの影が薄かった十九話

## 第二十話 忍び寄る影（前書き）

お気に入り登録件数がいつの間にかに700件突破！！  
この二日間で何が！？

## 第二十話 忍び寄る影

ド・オーシア領の都市『ローゼンタール』の視察のために訪れた国王夫妻とその護衛は警官隊に敬礼されながらド・オーシア伯爵家である私達に近づいて来た。

そして、面倒なお約束の儀式が始まった。

「国王陛下、王妃殿下。ようこそおいで下さいました。此度のジェーラ地区の視察、心より歓迎いたします。日頃の政務や王都からの長旅でお疲れでございます。このジェーラ地区視察の間はゆっくり御寛ぎ頂けますよう、誠心誠意務めさせて頂きます」

「ド・オーシア伯爵。此度の出迎えご苦労。視察の間苦労を掛けるが宜しく頼む」

「ハッ！！ ご紹介致します。我が妻のカナリア。そして、我がオーシア家嫡男のレイでございます」

父上が母上と私を紹介した後、それぞれ前に進み出て頭を下げ自己紹介した。

「妻のカナリア・ベルティーン・ド・オーシアにございます」

「国王陛下、王妃殿下、お初にお目にかかります。先程ご紹介に与りました、レイ・レナード・ド・オーシアにございます。なお今回の視察の案内は私が勤めさせて頂きます」

「君の事は王宮でよく噂されているよ。よい後継ぎが出来たな、オ  
ーシア伯」

「お褒めに与り光栄です。では、地方政庁内をご案内致します。レ  
イ」

「はい、では国王陛下、王妃殿下、此方へ」

そう言った後、私は政庁に入口に向かいながら後ろを見て、後に続  
いて来ているのを確認し政庁内に入って行った。

「此方が地方政庁内部となっております。なおこの建物には財務局、  
環境衛生局、危機管理局、政策企画部、都市整備部等の機関が設置  
されており、ジェーラ地区発展の中核となっております。ご質問が  
有ればどうぞお聞き下さい」

その後、国王陛下夫妻からの質問を分かり易く説明しながら、各部  
署を回りその部署の主な業務を説明した後、私の執務室に移動した。

「此方が私の執務室になります。どうぞ、お入りください」

執務室の扉を開け、国王陛下、王妃殿下とその護衛二人を招き入れ  
た。

「失礼な事を言うが、君の執務室は少し小さくないかな？」

「書類仕事をするだけなので不便に思った事はありません。どうぞ、お座りください」

「ああ、そうさせて貰おう。それにしてもこの執務室はとても涼しいな」

「ええ、実はこの建物全ての部屋に空気を一定温度に保つマジックアイテムを置いているので夏や冬でも快適に過ごせます」

「王宮や宮殿にも欲しいな」

そんな世間話を数分続けたが、そろそろ仕事を再開する事にした。仕事と言っても交渉の様な物だが。

「実は国王夫妻に此方の執務室にお越し頂いたのは、陛下に折り入っております」

「願い？」

「ですが、その前に出来れば護衛の方はご退出して欲しいのです」

「何故、護衛を退出させなければならんだ？」

「今回は私共が入手した極秘文書も話に出てきますので」

そう言うと、陛下は即座に護衛を退出させた。話の分かる御人だ。それを確認した後、私は部屋にサイレントを掛けた。

「で？願いとは一体何なのだ？」

「それは諸侯空軍創設の許可にございます」

「……何故諸侯空軍が必要なのだ？」

「まずは此方の資料を御読み下さい」

私は前もって準備していた資料を陛下の前のテーブルに置いた。陛下は自分の前に置かれた資料を取り、無言で読み始めた。数分後、資料を読み終えた陛下は、ゆっくりと資料をテーブルの上に置き、頭を押さえた。

「……これはゲルマニア軍の」

「極秘文書です」

「確かなのか？」

「はい、本物を複写した物です」

「何故直ぐに知らせなかった」

「事実確認し、その文書に書かれている事が事実か否か確かめたため、直ぐに知らせる事が出来ませんでした」

「……諸侯空軍創設の理由は良く解った。だが空軍創設の許可は私一人では出せない。王宮に戻り次第、我が家臣と協議した後、必ず許可を出そう」

「ありがとうございます」

「だが、まだ願いが有りそうだな」

「はい、陛下。これらは宮廷貴族達の不正の数々です」

「この資料全てか？」

「はい」

「……君の望みは一体何だ」

「領地です」

「領地？」

「はい、現在、オーシア領は順調に発展していますが、このまま他領からの移民が入り続ければ領内の人口が過密状態になってしまう可能性があるので」

「それで新たな領地を欲していると、言う訳か。だが、これだけでは領地を与える事は出来ても、精々小さな領地だ」

「ではこの資料に加えて王都トリスタニアとその周辺の地図の作成と言うのはどうでしょう？」

私はそう言った後、席を立ち部屋に置かれた大きな金庫から二つの円柱状のケースを取り出し中の地図をそれぞれ見せた。

「これは一年前に作成したローゼンタールとその周辺の地図、そして此方が今年作成した地図です」

「地図？これが？」

「これほど隅々まで細かく書かれた地図は初めて見た。これほど精密な地図を作る事が出来るのか？」

「陛下の許可と協力が有れば直ぐに」

「分かった。良いだろう、地図に関しては君に任せよう。もちろん私も協力しよう」

「ありがとうございます」

「しかし、厄介な問題を抱えたものだが、お互いしっかり準備をしなければいかな」

ええ、と頷き、テーブルに置かれたゲルマニアの極秘文書を見た。

本当に厄介な事になったものだ。

『トリスティン王国領ド・オーシア侵攻作戦 計画書』

ゲルマニア軍の侵攻まで、あと三年

戦争の足音は確実に近づいて来ていた

## 第二十話 忍び寄る影（後書き）

戦争フラグが建ちました。

ゲルマニア軍の侵攻理由はオーシア諸島の資源が目的と設定するつもりです。

あえて言おう、後悔は無いと！

## 第二十一話 軍拡の波と婚約（前書き）

お気に入り登録件数がまた二日間で一気に700件から800件に増えました。

読者の皆様、ご愛読頂きありがとうございます。

## 第二十一話 軍拡の波と婚約

国王夫妻のジエーラ地区視察と花火大会が無事終わり、国王夫妻が王都に戻られて約二ヶ月経ち、ド・オーシア領ではゲルマニア軍侵攻に備え、領軍の戦力増強が計画、承認された。

それに伴い領軍全体の指揮権が父上から私に移譲され、西部方面隊はオーシア諸侯陸軍に名称を変更され、オーシア諸侯陸軍とオーシア諸侯空軍は私の指揮下で、元領軍軍人や移民からの志願者等を一からの教育・訓練が開始し、近代的な軍隊の創設を目指している。また、国王陛下から許可が下りた諸侯空軍創設は、本来『国境なき軍隊』に配備を予定していた主力戦闘艦であるアカツキ級フリゲート艦の建造を待っているため、今現在は訓練用に中古の空船を三隻購入し修理した後、それを使用し新兵を教育・訓練しながら、アルピオン空軍やトリステイン空軍の平民士官や下士官を中心に優秀な人材に声を掛けている。

なお、陸軍に採用・配備を予定している兵器は一部を除き建設中の軍事工廠で製造れることが決まっているが軍事工廠では技術的な問題で製造出来ない兵器は屋敷の直ぐ隣に建てた倉庫で政務が終わった後に私が製造している。

そのため倉庫には既に五十両の軽装甲機動車と四十両のイタリア陸軍のチェンタウロ戦闘偵察車を模した1式機動戦闘車が作られ、整然と並んでいる。

本来の『プラン』では独立までこれらの強力な兵器はプリミル教を警戒して使用しない予定だったが、ゲルマニア軍の侵攻が確実となった今では『プラン』を変更し、積極的に使用する事にした。

領土面ではゲルマニアの極秘文書の入手、汚職貴族の粛清の協力、

王都トリスタニアとその周辺の地図を作成・献上した功績により、新たな領地であるフォン・ユークトバニア領を与えられたため、現在はド・オーシア領に移民してきた者達をその領地に送って林や平原を農地を開拓させており、来年の更なる税収が期待されている。なお、その領を統治しているのは父上ではなく私だ。

ジエーラ地区、フォン・ユークトバニアの統治、オーシア領土防衛軍の創設等、多忙を極めている私は、大量の書類を昼前に全て片付け、屋敷の自室で久々の新しい秘薬作りに励もうとしていた。机には液体が入った試験管が試験管立てに並べ、その隣にアルコールランプ等の器具を準備していた。

「さて、始め」

ゴツゴツ！！

秘薬作りを始めようとした時、扉から鈍い音が聞こえて来た。

「はあゝ、またあいつか」

扉の向こうに居る奴に予想を付けながら扉に近づく間も鈍い音が部屋に響いた。

「今開けるから止める、ディオネ」

部屋の扉を開けると屋敷内にも関わらず、目の前にはキリンのディ

オネが居た。ディオネは私の言う事しか聞かず、不用意に近づくと電気を纏って襲い掛かる為、こつやって屋敷内に入つて来ても誰一人止められないのだ。

廊下に顔を出し、左右を見るとメイド達が此方を凝視していた。大きなため息を吐きながらディオネの頭を軽く叩き、部屋の中に入れてから扉を閉めた。

「絶対に邪魔をするなよ」

そう言うと、言葉が分かっているかの様に頷き、直ぐ近くの空いたスペースに寝転がった。それを確認し、私も秘薬作りを再開した。

「漸く『擬人薬』が出来た」

十数分後、丸薬状に形を整え漸く完成した。この秘薬は元々三年前に作るつもりだった『擬人薬』で、今まで作るのを忘れていたのだ。ちなみに三年前に作った『廃人確定!!』さあ、全てを吐き出そう。

超強力自白剤』は量産され『国境なき軍隊』や警察が捕まえたガリア・ゲルマニア・ロマリア・アルビオンの間者から情報を引き出すために使用されており、現在進行形で多数の廃人を作り出している。作られた秘薬を手に持ち、どの動物で試そうか考えたが後で考えればいいか、と思いい後の小さなテーブルに置き、散らばっていた器具等を片付けていると今度はしっかりと扉がノックされた。

「誰だ？」

「リリアナです。お話しが有って来ました」

リリアナとは、アニエスを含めたダングルテールの生き残りの内の

一人で、姉弟の姉である十五歳の少女である。私は片付けながら入室の許可を出した。

「どうぞ」

「失礼します」

扉を開け、リリアナが入って来た。入って来たリリアナの容姿は、身長が150センチほどで顔の造形はとても整っており、瞳の色はエメラルドグリーンで腰辺りまで伸びた藍色の長髪は白い肌とよくマッチしており、このまま成長すればかなりの美女になると私は予想している。

「話とは一体なんだ？」

「はい、レイには話しておこうと思って来ました」

「・・・聞こう」

「今日、ローゼンタールの募集所でオーシア諸侯陸軍に志願しました」

彼女は真っ直ぐ私の目を見てはつきりそう言い切った。

「・・・志願理由は？」

「もう大切な物を失いたくないからです」

「・・・」

やはりまだ心の中にダンゲルテールの事が残っているか。

「……リリアナが決めた事だ。私が止める訳にはいかない。しっかり使命を全うする事を総司令官として期待する」

「はい」

「しかし、リリアナがこの屋敷から離れたら淋しくなるな。だが弟のジョシユアはリリアナが居なくて大丈夫なのか？」

「あの子にはアニエスが居ます。大丈夫でしょう」

「ほう、それは興味深い話だ。だが姉離れされて淋しいんじゃないのか？」

「大丈夫、私にはレイがいますから」

リリアナはそう言い、私に微笑んだ。

「まったく、七歳の糞餓鬼に告白するな、バカモン……  
……はあ、これを渡しておく。お守りだ」

私は机の引き出しからある物を取り出し、リリアナに渡した。

「指輪？」

それは蒼色の綺麗な指輪だが内側には二つの高度な術式を組み込んだ物だ。組み込んだのは守護と回復の術式である。

「肌身離さず常に持っておけ」

「はい!!--」

リリアナは笑顔を浮かべながら返事をし、左手の薬指に嵌めた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「婚約指輪ありがとう。レイ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ああ、うん」

そんなつもりで指輪を渡したんじゃないのだが・・・・・・・・まあ、いいか。リリアナがこんなになうれしそうだし。

この瞬間、後にオーシア帝国第二皇妃でありながら帝国近衛軍総帥を務める事になるリリアナとの婚約が決定した。

第二十一話 軍拡の波と婚約（後書き）

また勢いで書いてしまった。

第二十二話 婚約のち修羅場（前書き）

今回はかなり短いです。

## 第二十二話 婚約のち修羅場

リリアナが指輪を眺めながら上機嫌で私の部屋から退出し、私は苦笑いしながら全ての器具を片付け、秘薬を金庫に入れようテールの上を見ると秘薬が無く、その横でディオネが口をモグモグと動かし、此方を見ていた。

……まさか

すると、ディオネが白く光り始めた。そして、体の形が徐々にヒトの形に変わり始め、それが終わると光が収まり、ディオネの姿を見て取れた。

身長は普通の女性に比べて少し大きく、170ほどあり、透き通る様な白い長髪は膝裏までまっすぐ伸びている。

顔の造形はとても整っており、白い前髪の間からは特徴的な蒼い角が生え、瞳は綺麗な紅い色をしている。

身体の方はDカップほどの大きなバスト、引き締まったウエスト、突き出したヒップ、更に腰の位置は高くその後ろから生えた白い尻尾、脚の付け根からすらりと長く伸びた脚、それら全てが合わさった全裸の美女、ディオネが現れた。

「……………」

「……………」

沈黙がこんなにもつらいと思ったのは初めてだ。

私はとりあえずベットから毛布を取り、ディオナに近づいた。

「まずはこれで体をk「ガチャ」て？」

毛布を渡そうと近づいた時、突然部屋の扉が開いた。

「あ、レイさっきの事な・・・んだ・・・けど・・・」

入って来たのは先程まで居たりリアナだった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・レイ」

「・・・・・・・・ハイ」

リアナは低い声で私の名前を呼び、私になんとかそれに返事をすると、目の前まで無言で近づいて来た。

「リ、リアナ？」

名前を呼ぶと、満面の笑みで口を開いた。

「女の身体が好きならそう言えば良いのに」

「何でそうなる!!」

そう否定すると、後頭部にけしからん感触がした。慌てて振り返るとディオナの顔が視界一杯に広がり、唇に柔らかい感触がした。



## 第二十三話 戦争勃発（前書き）

また時間がかなり進みます。

そして、お気に入り登録件数が900件を突破、1000件まであと少し。

ご愛読の皆様今後もよろしくお願い致します。

## 第二十三話 戦争勃発

あれから約三年の時が流れたオーシア諸島上空を一機のMF-1が特殊装備である大音量スピーカーを搭載しながら、とある任務のため飛行していた。

このMF-1はオーシア諸侯空軍第3戦術飛行隊所属の機体で、本来ならば国境なき軍隊に配備されるはずだった機体である。

「ウルフ1からHQへ、ゲルマニア艦隊を視認した」

『こちらHQ、直ちに作戦を開始せよ』

「ウルフ1、了解」

命令を受けたパイロットであるパトリック中尉はスロットルを開放し、機体の飛行速度が上げながらゲルマニア艦隊に接近した。

現在、オーシア領内の国境沿いにはオーシア諸侯陸軍と『国境なき軍隊』地上部隊が共同で防御陣地や砲撃陣地を敷き侵攻に備え、片やゲルマニア軍は軍事演習と言う名目で国境から三リーグ離れた平原に1万の兵力を集結させ、上空には十隻の艦艇が浮かべており、両者は睨み合いを続けていた。そして、資源の宝庫とも言えるオーシア諸島にも多数の輸送船を引き連れたゲルマニアの大艦隊が迫っていた。

『貴官の無事を祈る。必ず帰ってこい。交信終了』

パトリックは最後の無線を聞いて苦笑いしながら、操縦桿を握り直し、特殊装備のスイッチを押し警告を始めた。

『こちらはオーシア諸侯空軍である。貴艦らはトリステイン領オーシア諸島に接近している。今すぐに退去しなければ攻撃する。繰り返す、貴艦らはトリステイン領オーシア諸島に接近している。今すぐに退去しなければ攻撃する』

その後もゲルマニア艦隊の周りを旋回しながら続けていると、一隻の甲板上で何かが光ると、機体の数カ所にカンカンと何かが当たって弾ける様な音が聞こえた。対竜騎士迎撃用の散弾が撃たれたのだ。すぐに機体を艦隊から離し、総司令部に報告した。

「ウルフ1からHQへ、ゲルマニア艦隊から攻撃を受けた。繰り返す、ゲルマニア艦隊から攻撃を受けた。作戦成功だ」

『HQからウルフ1へ、よくやった。これでやっと正当防衛の下に攻撃が出来る』

「ハッハッハッ。成功させたんだ。特別危険手当、弾んでくれよ」

『総司令官に伝えておこう。すぐに帰投せよ』

「了解。これよりバレー空軍基地に帰投する」

パトリックは機体を傾けて旋回し、機首を所属しているバレー空軍基地に向けた。

この瞬間、のちにオーシア戦争と言われる事になる戦争が勃発した。

同時刻、オーシア諸島上空ではオーシア諸侯空軍所属のアカツキ級フリゲート艦十隻が艦隊旗艦である一番艦アカツキを先頭に単縦陣を組みながらゲルマニア艦隊に接近していた。

「アルゼフ司令、総司令部から報告です」

「作戦が成功したのか？艦長」

「はい、先程バレー空軍基地所属のMF-1がゲルマニア艦隊に警告中、攻撃を受けたとの事です。これを受け総司令部よりゲルマニア艦隊を第3戦術飛行隊と共同で殲滅せよとの命令を受けました」

「クツクツク、ようやく十隻の艦隊が百隻を超える大艦隊を食い殺す光景を目にする事が出来る。アルビオン空軍からオーシア諸侯空軍に身を移す決意をした過去の自分にキスをしたいよ」

「アルビオンは士官になれても艦長等には成れないですからね」

「艦長も同郷だったな」

「ええ、退役まで士官をするはずだった私が今やハルケギニア最強の戦闘艦の艦長ですよ」

「私はそれを通り越して艦隊の司令だぞ。それに今、艦橋内にいる乗員は全員平民だ。無能な奴（貴族）なんて一人も居ないぞ」

司令は笑いながら両腕を広げた。それを見て艦橋内に居た他の乗員達も笑い出し、空気が和らいだ。

「さて、お喋りも此処までだ。敵を食い殺すぞ。艦長！！」

呼ばれた瞬間に緩んでいた顔を引き締め、直立不動で次の言葉を待った。

「ハッ！！」

「あとの位で誘導弾の射程内に入る？」

「あと一リーグほどで射程内に入ります」

「よし、全艦に打電しろ。射程内に入り次第、全艦一斉に右舷90度に回頭、一式多目的誘導弾1番から4番を発射、その後全艦一斉に右舷180度に回頭し、さらに5番から8番を発射する。」と

アルゼフの命令は、80発の一式誘導弾がゲルマニア艦隊に襲い掛かる事を意味していた。

作戦成功の報告はオーシア西部に敷かれた陣地に配備された装輪装甲指揮車内に居た指揮官であるマーク少将にも届いていた。

「やっと攻撃出来る。しかし、何時攻撃されるか分からんのは心臓に悪いな。さて、早速始めるとしよう。第1高射中隊聞こえるか？マークは無線で第1高射中隊の隊長を呼び出した。」

『こちら、第1高射中隊隊長アラン少佐です。攻撃命令でしょうか？』

「そうだ、先程総司令部から攻撃命令が下りた。直ちに最大の脅威である敵戦闘艦を排除せよ」

「了解、直ちに攻撃を開始します。」

その十数秒後、高射陣地から一式多目的誘導弾が十発放たれ、戦闘艦の風石機関で発生する大量の魔力に吸い寄せられる様に全ての艦の側舷に命中した後も誘導弾はそのまま突き進み内部で炸裂したため、艦全体が風船の様に膨らんだ後、全ての艦が粉々になりながら落ちて行った。

マークはその光景を指揮車から降りて、冷たい目で見ながら誰にも聞こえないぐらいの小さな声で呟いた。

「汚い花火だ」

## 第二十三話 戦争勃発（後書き）

原作開始は一体何話になってしまっただろうか。

## 第二十四話 防衛戦

ゲルマニア領内で待機していた十隻のゲルマニアの戦闘艦が攻撃を受け撃沈した同時刻、オーシア戦争最大の戦闘であり一方的な戦闘になるオーシア諸島防衛戦が始まっていた。

Side:オーシア艦隊

オーシア諸島上空を北上し続けていたオーシア艦隊は一式誘導弾の射程圏内にゲルマニア艦隊を捉えた。

「司令！！敵艦隊が誘導弾の射程圏内に入りました」

「よし、全艦に無線を繋げる」

「既に繋いであります」

「準備が良いな。ふう〜……………」全艦に達する。これより当艦隊は敵ゲルマニア艦隊に対し、攻撃を開始する……………全艦、艦首一斉回頭、右90度！！回頭次第一式誘導弾1番から4番撃ち方始め！！」

アルゼフが命令を下すと、全艦が一斉に面舵を取って回頭し、単横陣を組み終えると全ての艦の右舷側の四連装発射機から合わせて40発もの一式誘導弾が発射された。

全ての艦が発射を終えると、アルゼフは無線で新たな命令を下した。

「全艦、艦首一斉回頭、右180度！！回頭次第一式誘導弾5番から8番撃ち方始め！！」

新たな命令を受け全艦が更に回頭し、全艦が艦首をほぼ同時に反対側に向け、全ての艦の左舷側の四連装発射機からも先程と同じ様に40発が発射された。

発射された80発の一式誘導弾は青空の空気を引き裂きながら、雲の向こうに消えた。

Side : out

Side : ゲルマニア艦隊

ゲルマニア艦隊旗艦の甲板上で今作戦の指揮者であるドランバルト提督は上陸に備え指示を出していた。

「全戦闘艦に伝達！！見張り員を増員させて警戒を厳重にさせる。そして、輸送船団にいる上陸部隊にも準備をせよ、と伝達しろ」

「ハッ！！」

その後も指示を出し、オーシア諸島上陸に備えた。

指示を出し終え、一息を着いた時、船首方向から大きな爆発音が続けざまに鳴り響いた。

「っう、一体何があった！！！」

すぐ傍に居た艦長に咄嗟に聞いた。

「私にも分かりません」

すぐに艦長に何があつたか情報を集めさせようとした時、見張り員がマストの上から大声で報告してきた。

「提督！！当艦の前方に配置されていた戦闘艦群が突然爆発し墜落してしまいました！！！」

その報告を受け、急いで側舷から身を乗り出し前方を確認した。だがそこには味方の戦闘艦は無く、視線を下にずらすと原型を留めず粉々になって海に落ちていく味方艦が見えた。そのあまりに無残な光景に、固まりかけたもののすぐに指示を出した。

「総員戦闘配備！！！見張り員、敵は何処だ！！！」

同時にこれだけの艦が事故を起こすとは考えられない。事故では無い以上、敵の攻撃としか考えられなかった。

そう考え、すぐに命令を出せたのはこの提督が優秀だと言う事を証明しているが既に手遅れだった。

「艦首方向から何かが来ます！！！」

「敵kつ！！！」

詳しく確認しようとした瞬間、激しい衝撃が走り甲板に打ち付けられた提督が最後に見たのは甲板が大きく割れ大量の木の破片が自分に飛んでくる光景だった。

Side : end

Side：第3戦術飛行隊

オーシア諸島のバレー島諸侯空軍基地から出撃した第3戦術飛行隊『レッドムーン隊』の12機のMF-1が機体下に一式誘導弾を一発ずつ搭載し、ゲルマニア艦隊に急速に接近していた。

『HQからレッドムーンへ、聞こえるか』

『こちらレッドムーン1、感度良好。良く聞こえる』

『先程、第1艦隊が敵艦隊に向けて80発の誘導弾を発射し、敵艦隊の半数以上を撃沈させた。レッドムーン隊は一式誘導弾を発射後、残った敵艦艇を第1艦隊到着まで退却させるな』

『どう言う意味だ？』

『恐らく残った敵艦艇は上陸部隊を乗せた輸送船団だと思われる。輸送船団をそのまま退却させてしまうと大陸における敵陸上戦力が増える事になる』

『第1艦隊と共に投降を呼びかければいいのか？』

『今のオーシアに大量の捕虜を養う余裕等無い。よって全ての敵艦を第1艦隊と共に撃沈せよ。繰り返す、全ての敵艦を第1艦隊と共に撃沈せよ!!』

『……レッドムーン1、了解』

『こちらレッドムーン4、隊長、本当にやるんですか？』

「それが俺達の仕事だ。・・・間もなく敵艦隊が射程範囲内に入る。全機、突撃隊形をとれ」

レッドムーン1が命じるとレッドムーン隊は大きな三角形の隊形をとった。

「射程範囲に入った。全機、一式多目的誘導弾を発射せよ」

搭載されていた一式多目的誘導弾は機体から一度離れ、点火し12発の一式多目的誘導弾は敵艦隊に向かって飛行を開始した。

「レッドムーン1から全機へ、これより敵残存艦を撃沈する。我に続け」

その後、ゲルマニア艦隊は第1艦隊とレッドムーン隊の攻撃により文字通り全滅した。

Side：オーシア領土防衛軍総司令部

「現在の戦況は？」

総司令官であるレイが聞くと一人の男が立ち、報告した。

「オーシア諸島に侵攻していた敵艦隊は第1艦隊及び第3戦術飛行隊の攻撃により全滅、また国境付近に展開していた敵陸上部隊には第1、第2砲撃中隊による砲撃と第1戦術飛行隊の爆撃によりかなりの損害を与えたと思われる、現在はハンベルク地方のブライト要塞に撤退中との事です。そして、第2戦術飛行隊はゲルマニア西部に繋がる街道を全て破壊する事に成功しました」

「よし、第1機甲大隊及び第1歩兵大隊、そして第2砲撃中隊を明日朝0700時にブライト要塞に向けて侵攻させる。第1、第2戦術飛行隊にも支援の準備をさせておけ」

「待つて下さい。総司令、援軍が来るまでは防衛に徹するのではなかったのですか？」

「実は援軍到着が何時になるか分からなくなった」

「何故!!」

「どうも国王陛下が病気で倒れたのを理由に、宮廷貴族がオーシアへの援軍を渋っているらしい」

「そんなバカな!! 侵攻されたんだぞ。奴らは何を考えてるんだ!!」

「落ち着け!!!...よって今後の方針を長期戦から短期戦へ変更する」

レイはそう言い終えた後、椅子にもたれ腕を組んで目を閉じ、小さ

な声で呟いた。

「役立たずが」

レイの咳きは誰も喋ろうとせず静かになった会議によく響いた。

第二十四話 防衛戦（後書き）

最後のつぶやきは誰に向けてのものだったのやら。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6882w/>

---

ゼロの使い魔～建国物語～

2011年12月2日01時16分発行